

東北学院礼拝説教集 第4号

〈特集〉

ひかり

まことの光があった。

その光は世に来て、すべての人を照らすのである。

(ヨハネによる福音書 第1章9節)

表紙イラスト・挿絵 ひぐちけえこ

<特集>

ひかり

東北学院礼拝説教集 第4号

2024年3月31日
東北学院宗教センター発行

目次

第四号発刊にあたって

原田 浩司
……………

6

副題「ひかり」について

野村 信
……………

7

◆許してくださるイエス様

↳ 神様の光を灯そう！

島内久美子
……………

8

◆イエスの変貌

松井 浩樹
……………

12

◆世の光として生きる

西間木 順
……………

16

◆海と空のあいだに

↳ 田中正造の警告

大西 晴樹
……………

20



◆ 光を！

〜小さくてもいい、消えない光がほしいのです！

野村 信 ……

26

◆ 夜明けの光

〜もう一日を生きよう

佐藤 由子 ……

32

◆ 希望という光

〜学ぶ意味と向き合って

大門 耕平 ……

36

◆ 世の光、キリストの誕生

〜世の光イエス、私たちへのプレゼント

川島 堅二 ……

40

◆ 光の子として歩む

〜理想をあきらめないために

木村 純二 ……

46

◆ 地の塩、世の光

〜ありのままです

椎名雄一郎 ……

52

◆ 光の中を歩もう

↳ 平和のヴィジョン

田島 卓
……

58

◆ 人生を照らす光

↳ 何を頼りに生きるか

藤野 雄大
……

64

◆ 一寸先は闇、しかし、その先は光

↳ 信頼を絆に

吉田 新
……

68

◆ 光の中を歩む

↳ 罪の告白の先に

渡邊 有美
……

72

◆ 弱さの中で現れる力

↳ 共感すること、寄り添うこと

渡邊 蘭子
……

76

◆ 光は暗闇の中で輝いている

二〇二三年 職員クリスマス礼拝説教

原田 浩司
……

80

◆ 恐れずにキリストを迎えて

二〇二三年 東北学院大学クリスマス礼拝説教

中村 慎太
……

86

◆ あなたは、神から恵みをいただいた

二〇二三年 公開東北学院クリスマス礼拝説教

荒木 聡
……

92

あとがき

原田 浩司
……

100

第四号発刊にあたって

二〇二三年度に東北学院の各設置校で語られた説教を含め、おもに東北学院大学の土樋、五橋キャンパスの大学礼拝で語られた説教から、本年度は東北学院のスクールモットー「L I F E L I G H T LOVE」より「L I G H T (光)」をテーマとした説教を各先生方に寄稿していただきました。

二〇二三年を振り返ると、五月八日に新型コロナウイルス感染症の危険度を示す分類が第二類から第五類に公式に引下げられたことで、三年に及ぶ行動・活動に関する様々な制限や規制は解除され、日本社会には活気と明るさが戻ってきた一年でした。しかしながら、コロナ禍から続く物価高騰や長引く円安など、一般家庭の視点から見えてくる日本経済の状況は決して明るいものではなかったように思います。視野をさらに広げれば、昨年から続くロシアによるウクライナへの軍事侵攻は今なお続き、十月七日に起きた、ガザ地区のイスラム組織ハマスによるイスラエルへの奇襲攻撃を引き金に、イスラエル軍による膨大な報復攻撃によってガザは戦場と化してしまいました。二〇二三年は明と暗とがはっきりと分かれる出来事が多かった一年であつたかもしれません。

東北学院はその都度、時代に応じた改革を行ってきました。特に五橋キャンパスの開業、新学部の開設はその表れであると自負します。他方で、東北学院は時代に流され、飲まれることなく、聖書の教えを語り続けてきました。暗い時代の中にあつて、今年度の説教集のタイトルは「ひかり」です。聖書が伝える真の光、希望の光を、今のこの時代においてどのように伝えるか、寄稿していただいた各位がそれぞれの立場から苦闘した結晶でもあります。ぜひ、東北学院のキリスト教教育の神髄に、本説教集をとおして触れていただければ幸いです。

副題「ひかり」について

前回の「いのち」に続いて、本号は「ひかり」を特集します。本学院のスクールモットーである、「LIFE LIGHT LOVE」は、創設者の一人シュネーター先生が、この言葉を大切にされました。この三つとも聖書から得られた言葉ですが、いずれもイエス・キリスト御自身について語る言葉です。「ひかり」について言えば、「私は世の光である。私に従う者は闇の中を歩まず、命の光を持つ。」とイエスは言われました（ヨハネ八章一二節）。あるいは、「私は、世にいる間、世の光である。」と（ヨハネ九章五節）。

そこで次のように私たちに勧められます。「光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」（ヨハネ一二章三六節）すなわち、こそこそと暗闇の中を歩くような生き方をするのではなく、イエスの光の中に、すなわち聖書の教えに聞き、喜びと希望をもって生きるように勧められます。

聖書では、苦難や不安、不正や偽り、悪や悪霊、罪と汚れ、といった暗闇が私たちの世界から消えてなくなるとは語りません。光は闇に対比され、善は悪に対峙し、清さは汚れの反対にあります。そのことは、私たちが人間らしく生きるために欠かせない自由意志と深く関わっています。つまり、一人一人に主体性、判断、行動の自由が与えられていることを意味します。その自由の中でどのように生きるのかが問われます。その時に「ひかり」が一人一人にとって、欠かせない人生の歩みの指針となります。良い生き方をそれぞれが模索し、自身の成長に役立させてほしいと願っています。



許してくださるイエス様

幼稚園 園長 島 内 久美子

ヨハネによる福音書 八章一〜一一節

「イエスはオリブ山へ行かれた。²朝早く、再び神殿の境内に入られると、民衆が皆、御自分のところに来て来たので、座って教え始められた。³そこへ、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、イエスに言った。「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。⁵こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうかお考えになりますか。」⁶イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。⁷しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で罪を犯したことはない者が、まず、この女に石を投げなさい。」

⁸そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。

⁹これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った。¹⁰イエスは、身を起こして言われた。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。

だれもあなたを罪に定めなかったのか。」「女が、「主よ、だれも」と言うとき、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」

(聖書協会共同訳)

自分が間違ったことをした時、「あゝあ、間違っちゃった」と反省したり、謝りたいと思った時に、「それをしてはいけないんだよ」「先生に言ってやる」とお友達に怒って言われたり、みんなの前で大きな声で言われたら、自分がやったことだけど悲しくなるし、怒りたくもなりませんね。

ある時、悪いことをした女の人がイエス様の前に連れてこられました。昔、その国ではその悪いことをしたら石をぶつけられるという罰を受けなければなりません。連れてきた人はイエス様に、「あなたはどうかお考えになりますか」と聞きました。するとイエス様は「あなたたちの中で、一度も悪いことをしていない人がこの女の人に石を投げなさい。」と静かに言われました。すると、怒って女の人を連れてきた人は、一人、また一人と女の人から離れていきました。なぜみんな離れていったのでしょうか。そうですね、イエス様に言われて考えた時に「あの時：」「ああ、ついやってしまった：」と自分がしてしまった悪いことを思い出して恥ずかしくなったのでしょうか。

その時の女の人はどのような気持ちだったのでしょうか。「どうせ私は悪い人間なんだ」と暗い心でいたと思います。イエス様も怒って罰を与えるだろうと怯えていたと思います。何よりわかっていても悪いことをしてしまう自分のことが嫌いになっていったと思います。間違った時に怒られたり、責められたりし

た時の気持ち、皆さんもわかりますよね、けれどもイエス様は優しいお顔、優しい声で「私はあなたに罰はあたえませんが、もうしてはいけませんよ」と言われました。そのお言葉で暗かった心に神さまの光が射し、きつと女の人も「もうしない」と思ったことでしょう。

皆さんは悪いことをしたことがありますか。そうです、人間は誰でも間違えます。しかも何度も何度も間違えます。けれどもその度にイエス様は「もうしてはいけませんよ」と優しく許してくださいます。私たちはその一言で、心に光が射し神さまの愛を取り戻すことができますのです。皆さんも間違ったことをした時、自分は悪い子なんだと思わないでください。皆さんは神さまに愛されている光の子どもなのです。間違っても許してくれるイエス様のお言葉どおり、お友達の間違いをわかってあげられる優しい光を心に灯しましょう。そしてこれからも光の子として歩んでいきましょう。

《祈禱》

天の神さま、今日も神さまにお祈りができて嬉しいです。私たちはすぐに間違ったことをしてしまいます。

けれどもその度に許して下さるイエス様のお言葉を聴いて光の子どもとして歩けるように支えてください。

このお祈りをイエス様をとおしておきください。アーメン

あなたがたは、以前には暗闇でしたが、
今は主に結ばれて、光となっています。

光の子として歩みなさい。

(エフェソ信徒への手紙第 5 章 8 節 新共同訳聖書)





イエスの変貌

中学校・高等学校 宗教主任 松井浩樹

マタイによる福音書 一七章一―二三節

1 六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。
2 イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。3 見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。

4 ペトロが口をはさんでイエスに言った。「主よ、わたしたちがここに居るのは、すばらしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」5 ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声が雲の中から聞こえた。
6 弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。7 イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。「起きなさい。恐れることはない。」8 彼らが顔を上げて見ると、イエスのほかにはだれもいなかった。

9 一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはならない」と弟子たちに命じられた。10 彼らはイエスに、「なぜ、律法学者は、まずエリヤが来

るはずだと言っているのですしょうか」と尋ねた。IIイエスはお答えになった。「確かにエリヤが来て、すべてを元どおりにする。12言っておくが、エリヤは既に来たのだ。人々は彼を認めず、好きなようにあしらったのである。人の子も、そのように人々から苦しめられることになる。」13そのとき、弟子たちは、イエスが洗礼者ヨハネのことを言われたのだと悟った。」

(新共同訳)

「イエスの変貌」という有名な記事であります。何が変貌するのかといえますと、主イエスの顔が太陽のように光輝いたと同時に、その主イエスの着ている服も、光のように白くなった、ということが語られています。ただ、二千年前ですから服を白くするといっても現在のような漂白剤や、コーティングのたぐいはありません。おそらく自然に入手できる消石灰などを使って、今で言うところのクリーニングの商売をしていた人たちが実際にいたようであります。どのようにきれいにするか、白くするかなどの、詳しい作業工程などは各店舗での企業秘密であって、その働く職人によって、随分と腕に差があったようであります。

そこで、選ばれた腕の良い職人だけが、王様の着る服であるとか、大祭司が着る礼拝用のガウンのクリーニングを任されていたと思われまます。その職人技が生み出す、見事な美しい白さに多くの人々は驚いたのであります。

それをしのぐほどの「光のような白さ」を、主イエスはままとわれた、つまり、この世に存在する「単な

る白」ではないものを主イエスがまとわれた、ということと結局の所、あのナザレのイエスは実は神である、救い主であることをマタイ福音書はこの一七章で初めて公に示した、その意味で有名な記事であるのです。

ところが、その華々しい主イエスの姿ではありませんが、この姿を目撃したのは、大勢の群衆の前ではありませんでした。弟子たちの前、しかもわずか三人の弟子、ペトロ、ヤコブ、ヨハネだけにその姿を表すという限定されたものであります。しかも高い山へ登られてでありますから、野次馬であふれかえるようなことではなく、あくまで三人だけが目撃するのです。そして、いつまでも山に登ったままとどまることなく、すぐに山を降りるのです。三人の弟子と共に山を降りた主イエスに、もはや真っ白な輝きはありません。おそらくいつもの埃と汗にまみれた、みすばらしく、とても清潔とは思えないであろう貧しい姿を見せるのです。

ここで弟子たちは思うでしょう。あの山の上で見た、真っ白に光輝いていた主イエスは幻だったのか、勘違いだったのか。そしてこの記事を読んだ私たちも、この主イエスの変貌の記事を聞いても、劇的な慰め、励ましを見出すことはないでしょう。

ただ、静かに光り輝く主イエスに思いを馳せる時、神が本当にいるのかもしれない、とふっと思う時があるのではないのでしょうか。とりわけ、今日の記事にあるような山であるとか海などの自然、また近年、話題となっているパワースポットなどを前にすると、その不思議な雰囲気やなんとも言えない力に圧倒される経験をしたこともあるでしょう。その一方で、神なんているはずがないと思うことも私たちにはあります。つらい、苦しい、なぜこういう目にあうのだろう…そこには、神を見出すことができない私たちが

いるのです。しかしながら、聖書の文脈は、神はいる。しかもじっと見守るだけではなく、暗闇でこそ輝きを増すキリストは今も、私達一人ひとりを導いておられるという人格的な神として、その私たちの道標となられ輝き続けているのです。

《祈り》

主なる神様。新しい命のもと礼拝をささげ、一日を始められます幸いを感謝いたします。
心穏やかに、キリストの私たちに對する愛を心にとめさせてください。

この祈りを、主の御名によって祈ります。アーメン。



世の光として生きる

榴ヶ岡高等学校 宗教主任

西間木

順

ヨハネによる福音書 八章一二節

12 イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」

(新共同訳)

私が最近観たミュージカルは、人間の「心の闇」をテーマとしていた作品でした。

「みんな、闇を抱えて、もがき苦しみながら、一生懸命生きている。」こんなセリフが印象的でした。

私たちは、それぞれ、誰にも言えない悩みを抱えています。苦しさ、つらさ、悲しさなどを抱えています。それらを、このミュージカルでは「心の闇」としているでしょう。

心の中で闇が広がっていくと、生きづらさを感じてしまいます。自分の抱えている闇に押しつぶされてしまいそうになります。何とか自分の心の闇を、光に変えようと努力します。しかし、自分の力で闇を光に変えることができず、挫折してしまうかもしれません。

そのような私たちに、主イエスは、「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」と語りかけてくださっておられます。

それでは主イエスの言う「光」とはどのような光なのでしょう。私はキリスト教の高校に通っていたので、聖書の授業で「主イエスは、神の光を、私たちに向けて反射させるのだ」と教わりました。

主イエスは、まるで反射板のように、神の光を、私たちに反射してくださっているのです。私たちは、主イエスを通して、神の光に照らされているのです。その光は決して大きな光ではありません。小さな光です。それでも、その光によって、闇を光に変え、私たちの歩みを守り導いてくださる神のみに、私たちは気づくことができるのです。神がどのくらい私たちを愛してくださっているお方なのかということに、気づくことができます。主イエスを通して、私たちは神の愛と神のみに気づくことができるのです。

今日の箇所を引用しつつ、東北学院の第二代院長のシュネーター先生は次のように言っておられます。

「また日本の将来に光明の必要がある。すなわち知識の光明である。……私のここで言うのは普通の知

識ではなく、人生に取りて最も必要な宇宙の創造者、支配者につき、人生の真の道、真の目的につき、また人生の運命についての知識を指すのである。イエス・キリストは「我は世の光明なり、我に従ふ者は暗きの中を歩かず、生命の光明を得るなり」と言われた。この光明を自己に所有する人格者となり、これを広く世に伝え、永久に輝くように努める必要がある。」

シュネーダー先生は、「この光を自己に所有する人格者となり」と言っておられます。自分の力で、自分の努力で、この光を自分の心に灯すことはできません。主イエスが私たちの心に神の光を灯してください、心になければ、心に光を灯すことはできません。主イエスは、私たちの心に光を灯すだけではなく、その光が消えないように配慮してください。この光が自分の心に灯されていることに気づいたときに、私たちは、主イエスとともに神の道を歩いていくのです。

主イエスによって神の光が照らされている私たちは、すでに「世の光」です。ですから今度は私たちが反射板となって、主イエスから照らされている光を、他の人に、闇を抱えて生きている人たちに、照らしていくのです。神の愛を用いて、他者に寄り添い、他者と共に良く生きていくのです。

《祈り》

父なる神

新しい命を与えてくださり、この学校へと招いてくださり感謝いたします。

あなたの招きに応え、生徒教職員が共に礼拝を捧げることができ、感謝いたします。

あなたが、主イエスを通して、私たちの心に光を灯してください。

どうぞ、そのことに私たちが気づくことができますように。

そして、あなたの御心を知り、それを、この世で実践していくことができますように。

あなたの愛を用いて、他者と共により良く生きていくことができますように、導いてください。

この学校に連なる生徒教職員一人一人が、「今日もこの学校に来てよかった」と思える一日に共にしていくことができますように。

今、この場におりません友のために祈る心を与えてください。

すべてのことを当たり前だと思うのではなくて、どんなことにも感謝する心を与えてください。

この学校につらなる生徒教職員の上にあなたの恵みと平和が豊かにありますように。

この祈り 貴い我らの主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン



海と空のあいだに

院長・学長・宗教センター所長 大西晴樹

創世記 一章六く七節

6 神は言われた。「水の中に大空があり、水と水を分けるようになれ。」
7 神は大空を造り、大空の下の水と、大空の上の水とを分けられた。そのようになった。

(聖書協会共同訳)

この夏は、平年に比べて四、五度高く、酷いほど暑い日々が続く、仙台においてもクーラーを二四時間つけっ放しにしないと熱中症で倒れるような毎日でした。人類は、産業革命によって豊富で便利な生活を手に入れた反面、その生活から生じる廃熱、廃品への対策を怠ってきたために、特に今世紀に入ってから地球温暖化が急激に進行し、もう後戻りできないところまで来てしまったのではないかと焦燥感に駆られるような暑い日々でもありました。

今読んだ聖書の箇所は、天地創造二日目のシーンであります。創世記が書かれた年代は、紀元前五世紀から六世紀の頃であり、いまから二六〇〇年以上も前の古代メソポタミアやバビロニアに共通する宇宙観が述べられています。

「水の中には大空があり、水と水を分けるようになれ」とは、創世記第一章一節の「初めに神は天と地を創造された」という言葉をさらに説明する内容となっています。基本的に世界は平面であり、水から構成されているのですが、その真ん中に「大空」（ラキア）という圧延された塊、すなわち、ガラスでつくられた堅いドームのようなものが平たい円盤のような大地を覆っているという理解です。ラキアには穴が開いていて上の水が下に流れる。それが雨。下の水は一か所に集められ、乾いた陸と海ができています、このように描いているのです。私たち現代人は、温暖化によりラキアの穴を破壊し、その穴を大きく開けてしまい、洪水や海水面の上昇に苦しんでいるというところでしょうか。

さて、産業革命後の日本において、廃熱について意識されてきたのは、地球の生態系が吸収できる以上の、CO₂をはじめとする温室効果ガスを吸収できなくなった一九八〇年代の後半からです。また廃品についても、日本独自の言葉である「公害」という言葉が一般化したのが戦後の一九五〇〜六〇年代に工業

化が急速に進行し、汚染物質の垂れ流しによる自然環境破壊が進行し、汚染地域に暮らす多くの住民を苦しめるようになってからです。

先日、最高裁において水俣病の判決が出されていましたが、皆さんもご存知だと思いますが、石牟礼道子さんの『苦海浄土…わが水俣病』という有名な文学作品は、九州の不知火海で起こった水俣病を取り上げ、そこに住む住民たちとその生活を支える豊かな自然環境が、チッソ水俣工場から出てくる廃品であるメチル水銀の垂れ流しによって、どれほど破壊され、どれほど多くの尊い命が奪われていったかを描いています。タイトルには「くがいじょうど」という仏教用語が用いられています。仏教用語で「苦界」とは、文字通り、苦しみや悩みの多いこの世の世界のことですが、それを彼女は苦しみや悩みの多い海としての「苦海」という言葉に置き換え、その海が本来自然環境豊かで美しい「浄土」である、仏教用語でいえば、「穢れのない究極の世界」であり、その世界が不知火海なのだと言説的に表現したのです。この作品は、政府により水俣病がようやく公害病であると認定された一九六八年の翌年に出版され、一世を風靡しました。しかしながら、それ以前に断続的に地元の文学雑誌に発表したこの作品の原題は、聖書に由来する「海と空のあいだに」でありました。聖書と内村鑑三全集、そして内村の『一日一生』を読んでいた石牟礼さんは、明らかに本日の聖書の言葉、神は大空を造り、その上と下に水を分けたというくだりに注目し、神が造られた天と地は分かれているけれども、一体であるという考え方に影響を受けていたのだと、若い日に水俣で過ごし、石牟礼さんとも交流のあった日本基督教団の岡田仁牧師は述べています。今日は、石牟礼さんの文学作品には立ち入りません。その代わり、石牟礼さんに影響を与え、神の創造された自然環境を人間が破壊することの愚かさを早くから告発し、神の創造のもとに、自然と共にあるという人間の生

き方を告白した田中正造について取り上げてみたいと思います。

以下、正造と呼びますが、正造は、日本で最初の公害事件である足尾鉍毒事件とかかりました。栃木県にある足尾銅山は江戸時代から通貨の素材を提供するために開かれていましたが、明治になり古川市兵衛により電線等、日本の産業革命の素材を提供するために再開発されました。当時は、廃品に対する配慮はなく、排煙、鉍毒ガス、鉍毒水という有害物質を周辺地域にまき散らすことになりました。とりわけ、渡良瀬川を通して鉍毒は下流域に到達し、稲が立ち枯れるなどの被害を農民たちにもたらしました。

正造という在地の政治家は、農民の反対運動の先頭に立ち、公害の真相を国会で訴え、それが聞き入れられないと、国会議員を辞めて明治天皇に直訴するまでにおよびました。獄中生活を経たのち、晩年は渡良瀬川沿いの貯水池建設のために強制廃村となった谷中村に移り住み、七一歳で支援者周りの途上で客死するまで日本最初のこの公害事件を告発しつづけました。そのような正造の死亡時の全財産は信玄袋だったの一つでした。その中には、書きかけの原稿、日記三冊、帝国憲法とマタイ福音書の合本だけしか入っていませんでした。地域のお寺で行われた葬儀には、正造を慕う地域の農民ら三〇万人が参列したともいわれています。正造は、教会に通うようなクリスチャンではありませんでしたが、晩年の生涯を支えていたものは、遺留品からも分かるように明らかにキリスト教の教えでした。

正造の神に対する考え方は「至誠しせいの大おほい」という言葉で示されます。至誠、すなわち、その誠の心が遍く、広いという意味です。正造の日記には、「神は益する所を選んで照らさず、益する所にもみ雨降らさず、瓦石がせき（＝無価値なもの）の上、河原の上にも雨降り、不毛砂漠にも日を照らされ賜うなり。神の目神の心はこれ等の小区別より愛憎褒貶あいぞうほうへんを異にせず、ただ一帯に広く愛育セリ」（一九〇九年八月六日）と述べら

れています。神は、どこにでも、日を照らせ、雨を降らせ、偏りがなく、広域性があるという点において、「至誠の大」、すなわち、普遍的な愛の神なのです。神は天地を創造し、その循環運動の恒常性を支配する神なのです。気候変動で苦しむ現代人は、異常気象を嘆いています。私たちは天地創造の神がそもそも「至誠の大」であることを忘れ、途方に暮れているのではないのでしょうか。

先ほど、『苦海浄土…わが水俣病』の原題は、「海と空のあいだに」であると述べました。正造にとっても、水と空気は特別に重要な存在でありました。「食前の祈り」と題した日記にはこのように綴られています。「天地の間に水と空気とを求めて食するは虚心なり。その虚心に至らば、その時我心は神の心に適えるときなるを知り、つとに初めてその時神を見ん。真に我が心に見ん。また目に見えるの如きなり。また真に水と空気とを飲食呼吸するに至らざれば、食前の祈禱いまだ通ぜざるものたり」(一九〇九年一月)。この意味は、水と空気を大切な神の賜物と直感する所に信仰の根拠があるということです。もしそうでなければ、食前の感謝の祈りは神に届かない。水と空気の重要さを受け入れてはじめて、神を知ることができる。温室効果ガスによって水や空気を汚し、海水温の上昇や高温化を招いてしまっている現代人は、水と空気の大切さに立ち返らなければ、食前の感謝の祈りは神に届かないのです。

最後は、そのような自然を破壊している人間の罪に対する正造の告白です。それは天地を忘れ、荒廃させ、その回復を怠った罪であり、その罪を天地に謝して改めなければならぬと正造は言います。「山川の破れは人心の破れより生じたもので、川のほとりを見れば涙の流れた跡があり、人の涙の流れた川は人も流れ、作物も流れる」と、洪水のたびに被害にあう現状を嘆きます。しかし、正造は諦めません。被災地を歩けば歩くほど、「無限に怖れ、怖ろしくな」るのですが、他方で、いよいよ深く研究しなければな

らない、研究の重要さを説くのです。「もし誰か、もう今更悔いても間に合わないという者があれば、自分
分は断じていう。悔いれば必ず対処するすべは見つかる」そういうながら、正造は死を迎え、日記は絶筆
となりました。

日本で最初の公害事件と向き合った田中正造は、聖書の引用や遺留物から判断して、旧約聖書を読んだ
ことはなかったのではないかといわれています。それでも、正造にキリスト教を教えた新井奥邃や新約聖
書のパウロ書簡を通じて創世記の天地創造を知っていました。生きとし生けるものの恵みの源であり、神
が創造された「海と空」と「天と地」を人間が破壊し、汚染することは、「生命を付与する神」をないが
しろにする行為にほかならず、心に神がないということが、環境破壊、自然界への暴力を生む行為だと正
造は警告し、このまま突き進めば人間は必ず滅亡すると百十年以上も前に予言したのでした。



光を！

宗教センターチャプレン
野村
信

詩編 一三篇一〜六節

1 指揮者しきしやによって。賛歌さんか。ダビデの詩し。

2 いつまでですか、主よしゅ。

私わたしをとこしえにお忘れわすになるのですか。

いつまで御顔おかおを隠かくされるのですか。

3 いつまで私わたしは魂たましいに思おもい煩わづらいを

心こころに悲かなしみを日ひ々抱いだき続つづけるのですか。

いつまで敵てきは私わたしに対たいして高たかぶるのですか。

4 わが神かみ、主しゅよ、私わたしを顧かえりみ、答こたえてください。

私わたしの目めを光ひかり輝かがやかせてください

死しの眠ねむりに就つくことのないように。

5 私が揺らぐのを見て

敵が、勝ったと言わず

私を苦しめる者が喜ぶことのないように。

6 私はあなたの慈しみに頼り

私の心はあなたの救いに喜び躍ります。

「主に歌おう

主が私に報いてくださった」と。

(聖書協会共同訳)

詩編の第一三篇には、最初に、四回も「いつまでですか」という言葉が出て来ます。具体的には、どう
いう状況で、この「いつまでですか」と訴えているかは分かりません。しかし、具体的なことが書かれて
いないので、その結果、人類にとってこの問いは、普遍的な問いとして受け止められてきました。

私たちも今も問い続けています。いつまで先の見えない、不安定な日々が続くのだろうか。特に、経済
的には、物価が上昇し、それに収入が追い付かず、生活が苦しく、少子化で将来の年金もあまりあてにな
らない。満足な就職ができるのだろうか、こんな状態がいつまで続くのか、とつぶやきたくなります。

もっと身近な例を言えば、私たちの周りで大切な人が病気になるっています。「いつになったら、良くな

るのだろうか、早く回復してほしい」と願います。私の知っている人で、会社の倒産により多額の借金を抱えている人がいます。家も財産もみな処分して、小さなアパートで暮らしています。いつまでこんな不自由な、貧困の生活が続くのか。

戦火の中にいる人々を思います。悲惨で、生き延びるために必死です。いつまで戦争が続くのか。いつになったら終わるのだろうか。

私たち日本では、拉致被害という大きな問題があります。いつまで解決しないのですか、という嘆きがあります。核兵器の被ばく国として、私たちは核兵器の廃絶を訴えます。しかし、ますます危険が高まっており、自らの首を絞めている愚かさをみな感じています。いつまで人類はこの愚かさから解放されないのだろうか。

詩編第一三篇の詩人は、「いつまで」と嘆きますが、詩人の時代に劣らず、今もみんな「いつまでですか」と様々な仕方で、私たちは願ひ、訴え、求めています。

この詩人は、では何を望んでいるのかと言えば、四節で、「私の目を光り輝かせてください」と言っています。この言葉がとても印象的です。ヘブライ語では、「私の目に光を与えて下さい」という表現も可能です。以前使用していた『新共同訳聖書』では、そう訳しています。「目に光を与えられること」が願ひであると詩人は言います。これは、とても大切なことです。

闘病中の方が、かすかな光を感じる。すると何とか頑張ろうという気力が湧いてきます。貧しい生活を余儀なくされた人も、その状況においてささやかな光を見出してほしいと願います。戦火の中で、日々暗い中に置かれている人に、向こうにかすかな光が見えてきたら、それは幸いな予兆です。拉致された人々

の救済に、少しでも解決の光が見えてきたらどんなにいいか。

私たちは、総じて、苦しみ、悩み、不安な中であっても、未来にかすかでも、小さくても、「ひよっとしたら、これでいけるかもしれない」という光が見えてくれば、立ち上がれます。それに向かって前進しようという気力が湧き、努力を始めます。

昨日は、この礼拝で、お話された先生が、若い頃教会へ始めて行った時の話をされました。そこでお会いした牧師さんが笑顔の快活な方だったと言われました。しかし、全盲の牧師であったということです。この牧師さんは、高校生の時、突然両眼が見えなくなり、それ以来自暴自棄の生活を送っていたということです。ふと教会に行ってみれば、というアドバイスを耳にして教会に行くようになりました。それから牧師になったそうです。暗闇の中に何かおぼろげな光が見えた。それに向かって立ち上がった。今では笑顔の快活な牧師さんとなったと、昨日言われていました。

聖書は、キリスト御自身が「光である」と言っています（ヨハネ福音書八・一二）。キリストの光は、私たちの心にかすかな光を与えてくださいます。そんなに大きな光ではありません。かすかな、小さな光です。しかし、その光は、キリストから来る光であれば、暗闇を貫いて未来に向かう大いなる光です。希望の光であり、喜ばしい光です。なぜなら主イエス・キリストは十字架という暗闇の世界に向かい、三日目に復活されて、世界の主となって、私たちを照らして下さっているからです。

しかし、そうは言うものの、キリストが光なら、もっと明るく照らしてほしい、もっと明るい光を感じさせてほしいと思う人もいます。しかし、キリスト教の迫害者であったパウロという人物は、キリストの光に本当に照らされた人です。まともにキリストの光を浴びて、あまりの衝撃で目が見えなく

なってしまうました（使徒言行録九章）。三日目によく回復すると、人々の中に入って行って、キリストの光、すなわち福音を語る人になりました。パウロは、どんなに苦しくても、暗い監獄に投ぜられてもその光を心に抱いて生涯宣教のために尽くしました。

今日の詩編の四節には、「私の目を光輝かせてください」、あるいは「光を与えてください」と言っています。私たちは、希望の、幸いなる光を欲しています。聖書が何よりもその光を証しています。聖書は最初から一貫して神の光を語っています。創世記第一章に描かれる第一の日に、神は「光あれ！」と言われました。それは大きな光だったのでしょうか。いや人間の肉眼では見えない光だったので、大きいとも小さいとも言えないでしょう。なぜなら、第四の日に、天と地を照らす幾つかの光が登場して、私たちは周囲を見渡すことの出来る光を獲得したからです。

ですから、神から来る光は、ある人にとっては、かすかかかもしれません。ある人にとっては、希望という光かもしれません。ある人にとっては、淡い愛の光かもしれません。たとえそれが小さな光でも、ぼんやりした光であっても、失われることのない光であり、私たちを立ち上がらせ、生かし、前に向かって進ませてくれる力を宿しています。

東北学院は、LIFE LIGHT LOVEを掲げていますが、その二番目がキリストの光です。私たちは、この学び舎で、皆さんが、キリストの光、たとえそれが、どんなに小さな光であっても、それを感じ取っていただきたいと願います。その光は、地上にある光ではなく、神に通じる光であり、いや神から賜る光です。それを大切にし、そこに希望を置くことを学んでほしいと思います。



あなたの御言葉は、わたしの道の光
わたしの歩みを照らす灯。

(詩編119篇105節 新共同訳聖書)



夜明けの光

宗教センター主事（仙台南伝道所牧師）

佐藤 由子

哀歌 三章二二～二四節

22 主の慈しみは絶えることがない。

その憐れみは尽きることがない。

23 それは朝ごとに新しい。

あなたの真実は尽きることがない。

24 「主こそ私の受ける分」と私の魂は言い

それゆえ、私は主を待ち望む。

（聖書協会共同訳）

夢見人
ドリーマー

作詞・作曲：山本陽一郎

F Dm7 B♭ C F C/E

あ なに—は—す べて—が— できる—こ—と— あ
 なし—み—や—い た—み—を— か—か—え—て—は— な

Dm Am7 B♭ C F Bm7-5 C/B♭

な—は—ど—ん—な—け—い—か—く—も— な—し—と—げ—ら—れ—る—こ—と—
 に—か—を—あ—き—ら—め—て—た—け—ど—主—の—し—ん—じ—つ—が—主—の—

Am7 Dm7 Gm7 F/A B♭ B♭/C Gm7 F/A

を—わ—た—し—は—い—ま—し—り—ま—し—た—か—ま—わ—た—し—を—変—
 あ—わ—れ—み—が—い

B♭ B♭/C C F7-5/B B♭△7 C/B♭

え—て—ゆ—く— あ—す—が—た—と—え—見—え

Asus4 A/C# Dm7 Gm7 F/A

な—い—よ—る—も— み—こ—と—ば—の— や—く—そ—く—を—に—ぎ—つ

B♭ G7/B C F7-5/B B♭△7 C/B♭

て—あ—る—こ—う— ゆ—め—を—見—よ—う—あ—な

Asus4 A/C# Dm7 Gm7 F/A

た—と—生—き—る— この—み—ち—は— や—く—そ—く—の—み—ら—い

B♭ B♭/C F

へ— つ—づ—い—て—る—

March 2008

【あなたと生きる】

本日は「明日がたとえ見えない夜も、御言葉の約束を握って歩こう」と共に讚美いたしました。闇の力は生きる力を奪います。果てしなく続くように思える暗闇の中で私たちにできることは、主の約束の言葉により頼み、暗闇を打ち破る光を待つことです。

夜明けは、昨日との決別を告げています。今日は、絶望の続きではありません。「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない。それは朝ごとに新たになる。」

私たちに与えられる新しい朝は、「わたしと共に今日を生きよう。今日もあなたを愛している。」という神様からのメッセージです。聖書は、私たちがどのような時も、今日という日に、神の愛を受けて、神と共に生きようと呼びかけています。

【人間の弱さ】

「哀歌」は、故郷の崩壊の絶望のただ中で歌われた歌です。故郷が破壊され、消えていく。それは、私達から遠い出来事ではありません。責めるべき人を見つけ、その責任を問うことは簡単です。しかし本当に責めるべきは、人間の弱さや罪です。神が造られた世界は「極めて良かった」と創世記に記されています。人間の役割は、この極めて良い世界を管理することです。それゆえに、この務めを果たしえない私たちもまた、責められるべき一人なのです。哀歌を嘆き歌う人々は、人間の弱さや罪を自分のものとして、主に嘆いています。哀歌は、他人ではなく、自分と向き合うための歌なのです。

【地の塩、世の光】

東北学院は、3Lの精神と共に「地の塩、世の光」という聖書の言葉を大切にしています。それは東北

学院に導かれた一人一人が、「塩や光」のように、この世界になくはならない、大切な役割を担える人として、生きることができるようという願いがあるからだと思います。礼拝は、自分に与えられた人生の意味を見つげるための大切な時間です。

大学での単位や評価は、確かに大切です。しかしそれは、自分が「地の塩、世の光」として生きる為に、今、何をすべきなのかを教えてください。どこを目指して、どこに向かっていくべきなのかを考える為の一助です。私たちの人生には、目に見えることだけではなく、見えないことにも目を向ける時間が必要なのです。

【もう一度、もう一日】

私達は、走り続ける必要はありません。立ち止まること、休むことにも意味があります。先が見えなくなる時にこそ、聖書の約束の言葉と共に待つ。そのような繰り返しの中で、私たちは見えなかった道を見つけることができます。暗闇が暗闇で終わることはありません。光が見えないときも、そこに光はあるのです。それゆえに私たちは、もう一度、もう一日を生きることを、あきらめないでいたいと願います。

今日という日も、主なる神が一人一人の歩みを守り導いて下さいますように、心からお祈りいたします。



希望という光

大学宗教学主任 大門 耕平

詩編 一一八篇二三〜二五節

22 家を建てたる者の捨てた石が

隅の親石となった。

23 これは主の業

私たちの目には驚くべきこと。

24 今日こそ、主が造られた日。

これを喜び躍ろう。

25 どうか主よ、救ってください。

どうか主よ、栄えをもたらしてください。

(聖書協会共同訳)

さて、本日お読みいたしました聖書の箇所は、詩編一一八篇であります。この一一八篇は、一一一篇から続く詩であり、イスラエルの人々を苦しみの中から救い出した神への感謝がうたわれています。それは、価値観の転換であります。

詩編一一八篇での苦しみの背景となっているのは、バビロンでの捕囚生活でした。国が滅ぼされ、強制移住という苦しみの中、できることは、神を信頼し、助けを待つだけでありました。そして、神の前での正しさを守り続けたイスラエルの人々、そのイスラエルの人々に与えられた解放という喜びを歌ったものです。神を信じることで、人の目から見ると無力さを感じざるを得ない現実の中でも、それを失わずに居ることの大切さ、そして、それが報われること、無価値に見えたものが、価値あるものに変わるという価値の大きな転換が与えられることを信じることで、感謝することがうたわれています。

ある時、イスラエルの人々の国であったユダ王国に、アッシリアが攻めてきたとき、当時、強力な武力を誇っていたアッシリアの大群に囲まれたイスラエルの人々は、アッシリアの軍隊から「お前たちは神が守られると言う。しかしこの大軍を見よ。それはたわごと過ぎない。降伏せよ。」との勧告を受けたそうです。この言葉にイスラエルの人々は激しく動揺したそうです。神を信じるのが何になるのかということ、神を信じない人が言うのではなく、信じている人こそ日々の苦しみの中で絶えず感じざるを得ないことだからです。しかし、そういうなかでも、イスラエルの人々は「主のもとに逃れるほうが／人間に頼るよりもよい。」と語り、人の価値観で生きないことを貫いていきました。すなわち、人の武力、権力に頼らず、神への信頼をもって生きることを選択していったのです。

本日お読みしたところには、家を建てる者の捨てた石が／隅の親石となった。とあります。

これは、家を建てる際に無駄なものとして、必要のないものとして捨てられる石、すなわち、人間の価値基準では無駄に見えるもの、必要のないもの、小さなものが、隅の親石となる、すなわち、捨てられたものが、実は、その建物を支え得る礎になること、価値の逆転が起こることを伝えるものであり、小さく弱い存在であったとしても、救いが訪れることを信じているという確信が表現されています。

大学生の皆さんにとっては、学ぶことへの比喻として読むことができるのではないのでしょうか。皆さんは、学ぶことをどのように考えているでしょうか。学ぶとはどのようなことでしょうか。

以前、京都のある大学で講義をしたとき、ある学生から学ぶことについて次のような話を聞くことができました。

幼少期の時、私は、学ぶことが楽しくて仕方がなかった。幼少期の時は、毎日、自分の発見したことや気になったことを話したり、ノートに書いて、家族や先生に診てもらえることが嬉しくて、どんどんいろんなことを知りたいと思っていた。でも、中学校・高校生になると、試験での点数が評価されるようになり、学ぶ楽しさは少なくなっていた。大学生になり、大学の授業で、「あなたがしたいことは何ですか？どんなことに関心がありますか」と質問をされ、幼少期の時を思い出した。大学生の今、自分の意思を言う機会や自分がやりたいと思うことに挑戦できるようになった時、幼少期の時と同じ気持ちになれていると感じています。

今、みなさんはこの学生と同じような気持ちで学ぶ日々を過ごしていると思います。意味がある・意味がないという価値観ではなく、また、他者から決められるものでもなく、日々の学びの中で、あなた自身の学ぶものを見つけてもらいたいと思います。

そして、その時、東北学院で学ぶ皆さんには、人間的な価値観ではなく、それよりもっと大きな視点で学ぶことを続けてもらいたいと思います。

五橋キャンパスの北側に日本たばこ産業宮城支社のビルがあることをご存じでしょうか。その入口のところに、大きな碑が建てられています。それは、東北学院と同じ年に設立された東華学校のもので、

その碑には、一八八六年、東北学院の設立と同じ年、キリスト教に基づく徳育を行う学校として東華学校が設立されたこと。そして、五〇〇名を超える入学生があったことが記されています。

東華学校が設立された同じ年、東北学院は、仙台神学校として、民家の一室で二人の教師と六人の生徒で始められました。もしかすると、社会的、そして、人の価値観では、東華学校のように大きな学校ではないこと、社会的ニーズが少ないものと映ったかもしれません。しかし、東北学院を設立した押川先生、ホーイ先生は、そのような社会的、そして、人の価値観と向き合うのではなく、自分たちに与えられた使命として、学ぶことを望む六人の生徒に教育をなすこと、また、また、神への信頼を持つこと、キリスト教に基づいた教育を実施することが神の求めるものと信じてこの学院を始められました。そして、これが東北学院の礎となりました。それは今もこの東北学院が大切にしていることです。

一三七年の歴史の中で、東北学院が大切にしてきたもの、三上であらわされるLIFE LIGHT LOVEは、実学の中では忘れられやすいものでもありません。しかし、それを受け継いでいくこと、これが人としての成熟に大きな意味を持つものになることを信じて、日々の学びを続けていきたいと思えます。今の私たちの学びに対する視座、LIFE LIGHT LOVEを大切に学ぶの積み重ねが未来の礎になることを信じ、学びを続けていきましょう。



世の光、キリストの誕生

大学宗教授 川島 堅 二

ルカによる福音書 二章一〜一四節

1 その頃、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。2 これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録であった。3 人々は皆、登録するために、それぞれ自分の町へ旅立った。4 ヨセフもダビデの家系であり、またその血筋であったので、ガリラヤの町ナザレからユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。5 身重になっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。

6 ところが、彼らがそこにいるうちに、マリアは月が満ちて、7 初子の男子を産み、産着にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる所がなかったからである。

8 さて、その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。9 すると、主の天使が現れ、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。10 天使は言った。「恐れるな。私は、すべての民に与えられる大きな喜びを告げる。11 今日ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。12 あなたがたは、産着にくるまって飼葉桶に寝ている

乳飲み子を見つける。これがあなたがたへのしるしである。」¹³すると、突然、天の大軍が現れ、この天使と共に神を賛美して言った。

¹⁴「いと高き所には栄光、神にあれ

地には平和、御心に適う人にあれ。」

(聖書協会共同訳)

これが、後に今日世界に二十億を超える信者を擁する世界最大規模の宗教、キリスト教の創始者、世の光となるイエス・キリストの誕生について聖書が私たちに告げていることです。

「産着にくるまって飼葉おけに寝ている乳飲み子を見つける」これが長らく待ち望んだ救い主(メシア)のしるしだという。

これはとても不思議な記述ではないでしょうか。通常、偉大な宗教の創始者、教祖の出生、誕生には奇跡的な出来事がつきものです。

たとえばキリスト教と同じ世界宗教で、キリスト教の次に信者の数が多いイスラム教の場合、教祖のムハンマドの誕生の年は「象の年」といわれます。隣国のエチオピア軍が巨大な象に乗って大挙してメッカに攻め込んできた。それまで象という動物を観たことがなかったメッカの人たちはパニックに陥ったけれども、不思議にもエチオピア軍の間に伝染病が発生して軍は総崩れになって退却していった年なので「象の年」というそうです。そういう神の特別な奇跡が行われた年に預言者ムハンマドが誕生したというので

す。

キリスト教とイスラム教と共に世界の三大宗教とされる仏教の教祖、ゴータマ・ブツダの誕生も不思議な物語です。ゴータマの母マリアは出産のため里帰りの旅の途中で産気づいてしまい、ゴータマを生みます。旅先での誕生というのはイエスの場合と似ていますが、マリアはルンビニーという村で産気づき、マリアの脇の下から生まれたとされています。そして生まれ落ちたお釈迦様はすぐに七歩歩き、右手で空を、左手で大地を指して「天上天下唯我独尊」と言葉を発したということです。

わたしたちのイエス・キリストにも、生まれた直後一二歩歩いて「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」くらい言ってほしかったということになるでしょうか。

しかし、世の光となるイエス・キリスト誕生には、そのような奇跡はありません。イエスが救い主、メシアであることのしるしは「産着にくるまって飼い葉おけに寝ている乳飲み子を見つける」ことだということです。この何の変哲もない人間誕生の生の営み、おそらく皆さんもわたしも、記憶にはありませんが、生まれてすぐに布にくるまれ寝かされたのではないのでしょうか。そのような私たちごく普通の人間と同じ状況下に、神の子はお生まれになりました。

実は、長らく待たれた人類の救い主、神の子であるお方が、私たちと全く同じ姿でこの世に生を受けたこと、ここにキリスト教の救いの知らせ、福音の本質があるのです。

今日はメトロノームを持ってきました。少し、その音を聞いていただきます。

(百六十分のメトロノームの音をしばらく聞く)

これは何の音だと思いますか？ 今、この時に世界中で誕生している赤ちゃんの「音」です。「カチ・

カチ：」を「おぎゃー・おぎゃー…」と置き換えて想像してみてください。

「あなたがたは、産着にくるまって飼葉おけに寝ている乳飲み子を見つける。これがあなたがたへのしるしである。」

これは救世主、神の子がこの「カチ」の一つとなったということなのです。

同じことを、初代キリスト教会の指導者であるパウロは次のように言いました。

「キリストは神の形でありながら、神と等しくあることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にしてしるしの形をとり、人間と同じものになられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」（フィリピの信徒への手紙二章六～八節）

わたしたちと同じ一つの「カチ」として生まれ、その死は「十字架の死」だということです。十字架はイエスの時代の死刑の道具であったことは皆さんも知っておられるでしょう。死刑になるとするのは、最悪の死に方です。この世から公に「お前はもうこの世にいない、お前は生きる資格がない。いない方がいい存在だ」と宣告されて死に至らしめられる（殺される）ことだからです。

みなさんは、自分のこの世での姿、人生、生き様があまりにも平凡で無価値のように感じ、生きる張り合いも意味も感じられなくなる時はないでしょうか。

警視庁の発表によれば、昨年の自殺者数は二万八千八百八十一人で、前年に比べ八百七十四人（四・二％）増。一日に約六十人、一時間に二～三人が自殺をしていることとなります。私たちがクリスマス礼拝をし

ているこの時にも自殺しようとしている人たちがいるということです。男女別にみると、男性は十三年ぶりの増加、女性は三年連続の増加。自殺者の数がダントツで多いのが東京、次いで大阪、神奈川、福岡の順です。いずれも大都市です。多くの人と日々接していても、いや、多くの人と接しているからこそ、他人との比較で自分の平凡さ、価値のなさ、生きる意味や張り合いを感じる事ができない人が多いのかもしれない。

では、わたしたちが自分の生きる意味や張り合い、生き甲斐を実感するのはどのようなときでしょうか。わたしは小動物を飼うことが子供の頃から好きでした。小さな水槽に一匹のメダカがいると、それをいつまでも飽きずに眺めていられるそういう子供でした。小学生の時は親に無理を言って近所で生まれた子猫をもらい飼っていました。当時読んでいたSF小説に出てくるピートという猫からとってピートと名づけました。ピートは亡くなってもう五十年近くたつのですが、今でも時々夢に出ています。

六年前仙台に移り住んでからは一人暮らしですがウサギを二羽とメダカ、ドジョウ、小エビ、そして最近はペットショップで一目ぼれしてウナギを飼い始めました。生きているいのちがそばにいるというだけで心が安らぎます。誰もいない家に帰って「ただいま!」というのは変ですが、何かそこに生き物がいれば自然と「ただいま!」と声をかけることができます。人間とは本来、一人では生きていけない存在、ほかのいのちと共に生きるように造られた存在であると聖書は教えています。

世の光なる救い主イエス・キリストはそういう人間に与えられた神様からの究極のいのち、存在です。それも何か特別に選ばれた人、優れた人ではなく、何の変哲もない平凡な日常を生活している私たちに与えられた神様からのプレゼントです。たとえ全世界が、この社会すべてが自分の存在を否定し拒否するよ

うな時であっても、十字架の死に至るまでこの世の苦しみを負われたイエス・キリストは共にいてくださいます。このことをクリスマスのこの時、改めて覚えたいと思います。



光の子として歩む

大学総合人文学科長 木村 純 二

エフェソの信徒への手紙 五章八〜二〇節

8 あなたがたは、以前は闇でしたが、今は主にあって光となっています。光の子として歩みなさい。
9 光の結ぶ実^みは、あらゆる善^{ぜん}と義^ぎと真理^{しんり}との内^{うち}にあるからです。――主^{しゅ}に喜^{よろこ}ばれるものが何^{なに}かを吟味^{ぎんみ}しなさい。11 実^みりのない闇の業^{わざ}に加^{くわ}わらず、むしろそれを明^{あか}るみに出^だしなさい。12 彼^{かれ}らがひそかに行^{おこな}っていることは、口^{くち}にするのも恥^はずかしいことなのです。13 しかし、すべてのものは光^{ひかり}によって明^{あか}るみに出^だされて、明らかにされます。14 明らかにされるものはみな、光^{ひかり}からです。それゆえ、こう言^いわれています。

「眠^{ねむ}っている者^{もの}よ、起^おきよ。

死者^{ししや}の中から立^たち上^あがれ。

そうすれば、キリストがあなたを照^てらされる。」

15 そこで、知^ち恵^えのない者^{もの}ではなく、知^ち恵^えのある者^{もの}として、どのように歩^{あゆ}んでいるか、よく注^{ちゅう}意^いしなさい。
16 時^{とき}をよく用^{もち}いなさい。今は悪^{わる}い時代^{じだい}だからです。17 だから、愚^{おろ}かにならず、主^{しゅ}の御^{みこころ}心^{こころ}が何^{なん}であるかを

悟りなさい。18酒に酔ってはなりません。それは身を持ち崩す元です。むしろ、靈に満たされ、19互いに詩と賛歌と靈の歌を唱え、主に向かって心から歌い、また賛美しなさい。20いつも、あらゆることに ついて、私たちの主イエス・キリストの名により、父なる神に感謝しなさい。

(聖書協会共同訳)

今年にはコロナウイルスの感染症対策が三年ぶりに緩和され、明るい年になるかと思いきや、ずいぶん暗い話題が多かったように思われます。ロシア・ウクライナの戦争に続いて、ガザ地区でも戦闘状態に突入しました。不安な国際情勢のあたりを受けて、物価も相変わらず高いままです。日本の国内では政治不信が広がり、社会全体が閉塞感から抜け出られずにいるように感じられます。お読みした聖書箇所では、「今は悪い時代だ」という言葉がありました。二千年後の今は今で、やはり悪い時代であるように感じられます。

今日の礼拝メッセージのテーマは、聖書箇所に基づき「光の子として歩む」にいたしました。光の子として生きるとはどういうことを考える前に、暗闇の社会について、まずは考えておきたいと思えます。

今から百年ちょっと前の一九〇九年、日本の年号で言うところと明治四十二年、文豪夏目漱石が発表した作品に『それから』という小説があります。この作品の中で、漱石は主人公の長井代助を通じて、当時の社会に対する批評を論じています。

代助は、今の時代、人々が互いに心の中で相手を侮辱することなしに、人と接することができなくなっていると言います。相手が心の中で自分のことを見くだそうとされているとお互いに知りながら、表面上、笑顔を浮かべて会話をしている。そして、詰め込み式の教育を受けて社会に送り出され、目の回るほど働き使われるから、みんなゆとりがなくなり、他人を顧みることなく自分のことばかり考えて、ついには心が病み、道徳的にも退廃してしまふ。日本中どこを見渡したって、輝いている断面は一寸四方もなく、ここごとく暗黒だ。『それから』の主人公の代助は、このように語っています。

今の時代と比べて、どうでしょうか？ お互いに表面上は笑顔を浮かべながら、心の中で相手を見下そうとしているというのは、現代風に言うとも、マウントを取るといふ態度に当たるとかと思えます。教育は詰め込み式で、多くの人がゆとりをなくし、心が病んで、道徳的にも頹廢的になるといふのは、そのまま百年後の現代に当てはまる、あるいは現代のほうがより一層その傾向が強まっているようにも思えます。

社会がこのような状況になることの一因として、漱石は、文明が進めば進むほど、人は競争に駆り立てられて互いに孤立していくのだと述べています。学歴や収入などの競争で言えば、自分だけでなく親の学歴や収入、逆に子どもの学歴や収入まで比較の対象となつて、競争意識を煽っています。SNSなどが発達した現代では、例えば、流行の商品をいち早くゲットしたとか、話題のカフェでランチを食べたとか、日常の細部にまで他人との差異化や競争が浸透していると言えるでしょう。人を孤立化させ、心を疲弊させるような状況が蔓延しています。

『それから』の主人公・代助は、心の中では、人と人の心が触れ合えるような理想の人間関係を求めているのですが、今の社会にそれを求めても自分が傷つくだけだと考え、最初から諦めてしまっています。

少年期を終えて、青年期に差し掛かる時期には、もう人生で本当に大事なことは諦めてしまっているという若者の姿も、私にはそのまま現代に当てはまるように感じられるのですが、みなさんはどう思われるでしょうか？

これまでに、キリスト教の授業や礼拝で繰り返し聞いていることと思いますが、キリスト教の根本の精神は「愛」にあります。人々が互いに我を張って競争するのではなく、相手をいたわり思いやって、「愛」に満ちた社会を作り出す。おそらくそれは、誰もが理想として思い描く社会の姿なのではないかと思えます。

でも、現実はそうではない。競争の激しい現代社会で、そんな悠長な態度で生きていたら、自分が損をするだけだ。そう思って、多くの人が最初から理想の社会を諦めてしまっているのではないのでしょうか。言わば、社会全体が希望を失い、閉塞感や停滞感が蔓延しているわけです。希望はしばしば光に例えられますが、その意味で、今の時代は希望を失った暗闇の中にあると言えるかと思えます。

それでは、誰もが理想を諦め、閉塞感に満ちた社会の中で、どこに希望の光を見出すことができるでしょうか？ 今日の本堂では、「キリストがあなたを照らされる」と語られていました。希望の光は、イエス・キリストから来るものです。

しかし、それは実際には何を意味しているのでしょうか？ いったいどのように生きることが、「光の子として歩む」生き方になるのでしょうか？ もう少し考えてみましょう。

聖書箇所では、「彼らの仲間になつて」「実りのない闇のわざに加わる」のではなく、「主に喜ばれるものが何かを吟味しなさい」と語られていました。要するに、自分の生き方を周囲の人々や時代の考え方に

合わせるのではなく、主の御心に合わせるのだと教えているわけです。

先ほど、人々が互いに思いやり「愛」に満たされた社会こそ、誰もが望む理想の社会に違いないけれども、現実には競争社会が広がっているのです、そんな生き方をしていたら自分が損をすると考え、最初から理想を諦めているのが今の時代ではないかという話をしました。しかし、そこで現実に妥協して、自分の生き方や振る舞い方を現実に合わせてしまえば、結局、自分自身が「悪い時代」に加担したことになると思います。

あまり適切な例ではないかもしれませんが、今年、日本では旧ジャニーズ事務所の性加害事件が大きな話題となり、日本がいまだに著しく人権意識の低い社会だということを内外に知らしめました。それは、単にひどい性加害を犯した人物がいたということの問題ではありません。その人物が社会に強い影響力を持っていたために、テレビをはじめ雑誌や新聞などの各メディアがそれに迎合し、加害者に都合のよい情報を発信して、都合の悪い情報は隠蔽するという対応を長年続けたために、加害者を助長させることとなり、被害を野放図に拡大する結果を招いたというところに、この事件の社会的な課題があるわけです。

テレビ局や雑誌社などメディア企業の内部のことは知りませんが、その中にいると、仮に、そうした芸能事務所の横暴な態度に迎合するのはおかしいと思っても、そうしなければ、この先番組が作れなくなる、雑誌が刊行できなくなるといった上司の一言で、飲まざるを得ないことだと思わされてしまうのでしょう。結局、これが現実だからと言って現実に妥協して振る舞えば、その分だけ自分自身がその間違った現実に加担したことになるわけです。

それゆえ、聖書が教える神の御心を基準にするという「光の子」の生き方は、現実に流されない強い心

を持ち、あるべき理想を求めて生きるということを意味するかと思います。理想を理想として思い描き、それを追い求めてよいのだという聖書の教えは、まさに希望の光を指し示すものではないでしょうか。

なお、その際に、現実に合わせて生きている人を非難し、糾弾することに力を注ぐ必要はありません。聖書に「すべてのものは光によって明るみに出されて、明らかにされます」とあるのは、自分が信念を持って光の子として生きていけば、間違ったものは、いずれおのずとその非が明らかにされるといえるかと思えます。光の子は、ただイエスだけを見上げて、神の御心に適う生き方をしていけば、周囲のことに囚われる必要はないのです。



地の塩、世の光

大学宗主任 椎名 雄一郎

マタイによる福音書 五章一三―一六節

13「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられようか。もはや、塩としての力を失い、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。14あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。15また、灯をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家にあるすべてのものを照らすのである。16そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かせなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、天におられるあなたがたの父を崇めるようになるためである。」

(聖書協会共同訳)

もうずいぶん前になりますが、SMAPの歌う《世界に一つだけの花》が流行りました。当時、どこでもこの歌が聞こえてきたものです。私たちは「No.1」にならなくてもいいもともと特別な「Only one」と歌います。この歌は当時の多くの人々、とくに若者に大きな影響を与えました。私が感じたことは、やはり人間は皆ナンバーワンになりたいということ、しかしナンバーワンになることができるのは、競争のなかでは一人しかいないという現実です。歌は以下のように歌います。

花屋の店先に並んだ

いろんな花を見ていた

ひとそれぞれ好みはあるけど

どれもみんなきれいだね

この中で誰が一番だなんて

争うこともしないで

バケツの中誇らしげに

しゃんと胸を張っている

それなのに僕ら人間は

どうしてこうも比べたがる

一人一人違うのにその中で

一番になりたがる

競争をして、ナンバーワンになりたいと思う心、この心はこれまで人間が生き抜いていくために必要だったことは確かです。しかし、皆が幸せに生きていこうとするときに、時にナンバーワンを皆が目指すことは、他の人々を振り落とすことにもなってしまうます。ですから同じ土俵で競争をせず、一人一人が自身のすばらしさに気が付き、その個性、賜物を大事にすべきということが、この歌から読み取ることができます。つまりナンバーワンではなく、オンリーワンをめざせということなのでしょう。

人間はどのように生きていくことが幸せなのでしょう。ナンバーワンを目指すのか、またはSNAPの歌のようにオンリーワンを目指すのかです。イエスははっきりと言っています。私たちは「地の塩、世の光」と断言しています。この言葉はホーイ記念館一階の入り口にも掲げられているので、見たこと、聞いたことがある人も多いでしょう。今日はこの言葉をもう少し考えてみたいと思います。

「地の塩」とはどのような意味でしょうか。塩は塩化ナトリウムを主な成分とするもので、海水を乾燥させるか、岩塩により取ることができます。塩は調味料、そして食品の保存のために使用されますが、また塩には「清め」の役割もあります。「清め」の塩は旧約聖書に登場し、日本でも相撲の土俵上で使用される「塩」も同様でしょう。調味料としての「塩」はとても重要です。塩は分子量が小さいため、味が浸透する早さは、調味料の中で最も早いそうです。そして料理にアクセントを加え、まろやかさも加えます。塩加減は料理において重要で、入れすぎてしまうと、塩辛くなってしまいます。また面白いことに、スイカに塩をふると、さらにスイカが甘く感じたりもするのです。つまり塩味をつけることと共に、他の味を引き出すことも、塩の重要な役目です。これを私たちに当て嵌めてみるとどのようになるでしょうか。私たちは一人ひとり、それぞれの個性を生かしながらもそれを主張し続けるのではなく、調和を大切にす

ということになります。主張しすぎて、塩辛くならないようにも配慮もせよということでしょうか。たしかに料理の中で、「塩」が固まっていると、料理全体が台無しとなってしまいます。塩はやはり他の成分と結びついて、調和がとれた時に、もっとも力を発揮するのです。そして調和により、他のすばらしさを引き出すべき存在、それが「私たち」であるというわけです。

一方食品保存も塩の大事な役割です。古今東西、保存食に塩が使用されてきました。食品を腐らせないために、重要な役割を担っています。私たちに当て嵌めてみると、どのような時にもしっかりと考えたえをもつて、間違った道に進まないように（腐らないように）、導くことができるでしょうか。これは「清め」の塩としての役割にも通じるものがあるのではないのでしょうか。

次に「世の光」はどうでしょうか。聖書では「山の上にある町は、隠れることができない。また、灯をともして灯の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家にあるすべてのものを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かせなさい。」とあります。私たちは「光」なしでは生きていくことはできません。光の反対は暗闇です。どんなに素晴らしいものがあっても、光がなければ何も見えませんし、何もできないわけです。天地創造の物語でも、神様は「光あれ」とまず光を創造してします。

光と聞くと眩しいものを想像してしまいます。しかし、「世の光」というのは、私自身が「光る」ことによって人々、世の中を照らしなさいといっているのです。ですからスポットライトは自身に照らすのではなく、自分以外のものを照らしなさいと書いています。私たちは普段「光」を意識しません。例えば今はライトによって明るさが維持されています。実は「光」を操作することは大変難しい作業です。皆さん

の中で、舞台で演じたりしたことがある方はわかるでしょう。例えばこの講壇の上の聖書を照らすことを考えても、私の影が映らないように意識して、ライトを設定しなければならぬのです。そして皆さんの座っている席も明るすぎず、暗すぎず、ちょうど良い明るさになっています。そして明るさにムラがありません。このように設定するために、設計者はライトを配置していますが、実はとても難しい作業です。しかし私たちは普段、それが当たり前のように「光」を受け取って生活しています。このような「光」であるとイエスは述べているわけです。また「光」は暖かさを感じますし、また蝋燭の「光」をゆっくり見ていると心も落ち着くのではないのでしょうか。私たちはそのような人間であると述べています。

塩と光はある意味で「地にある塩」、「天からの光」と、真逆なもののようにも感じます。しかし「塩」、「光」に共通することは、どちらも私たちが生きていくうえで、必要不可欠なものです。しかしどちらも、私たちにとって普段の生活において普通に存在するもので、ほとんど気に留めません。食事に誘われたときに、「今日の塩はおいしい」と褒めることはまずありません。お肉がおいしかったとか、ソースがおいしいなどと言います。しかし塩がなければ、普段の料理は、作ることができないのです。「光」もなくなると初めて、その重要さに気が付きます。普段当たり前のように使っている電気が、停電などで来なくなると、普段、部屋を照らしてくれているライトのありがたさを感じるのです。

私たちは「地の塩、世の光」とイエスは言っています。「地の塩」になりなさい、また「世の光」になりなさい、と言っているわけではありません。私たちは「地の塩、世の光」なのです。主張しすぎなくても、私たち一人ひとりはこの世の中で、その存在そのものが、どんなに大事なもののか、それをイエスは私たちに教えてくださっています。ナンバーワンにもオンリーワンにもならなくてよいのです。私たち

のありのまままで十分であると述べています。この世に私たちを創造してくださった神様に感謝しつつ、日々「地の塩、世の光」として生きていきましょう。

《祈り》

お祈りします。

天の父なる神様、あなたは私たちを「地の塩、世の光」として創造してくださいました。感謝いたします。私たちはとかく、ナンバーワン、オンリーワンを目指してまいります。またそれが叶わなかったときに、大きな挫折を味わいます。しかし、あなたは私たちの存在そのものが、この世の中でなくてはならないものとして創造してくださいました。私たちはこの世の中で、「地の塩、世の光」として日々生活していくことができますように。この感謝と願い、主イエス・キリストのみ名により、お祈りします。アーメン



光の中を歩もう

大学宗主任 田島 卓

ヨエル書 四章五〜一〇節

5 あなたがたは私の銀と金を奪い
貴重な宝を自分たちの神殿に運び去った。

6 ユダとエルサレムの人々をギリシア人に売り渡し
故国から遠く引き離れた。

7 あなたがたが彼らを売り渡したその場所から
私は彼らを奮い立たせ

あなたがたの頭上に報いを返す。

8 私はあなたがたの息子、娘を

ユダの人々の手に売り渡し

ユダの人々は彼らを

遠くの国民、シエバ人に売りさばく。

確かに、主が語られた。

9 国々の民にこのことを告げ

戦いの備えをせよ。

勇士を奮い立たせ

戦士をことごとく集めて上らせよ。

10 鋤を剣に、鎌を槍に打ち直し

弱い者にも、「私は勇士だ」と言わせよ。

(聖書協会共同訳)

ミカ書 四章一〜三節

1 終わりの日に

主の家の山は、山々の頭として堅く立ち

どの峰よりも高くそびえる。

そして、もろもろの民が川の流れのように

そこに向かい

2 多くの国民が来て言う。

「さあ、主の山、ヤコブの神の家に登ろう。

主はその道を私たちに示してください。

私たちはその道を歩もう」と。

教えはシオンから

3 主の言葉はエルサレムから出るからだ。

3 主は多くの民の間を裁き

遠く離れた強い国々のためにも判決を下される。

彼らはその剣を鋤に

その槍を鎌に打ち直す。

4 国は国に向かって剣を上げず

もはや戦いを学ぶことはない。

(聖書協会共同訳)

イザヤ書 二章一〜五節

1 アモツの子イザヤがユダとエルサレムにつ

いて幻に示された言葉。

2 終わりの日に

主の家の山は、山々の頭として堅く立ち

どの峰よりも高くそびえる。

3 国々はこぞって川の流れのように

そこに向かい

3 多くの民は来て言う。

「さあ、主の山、ヤコブの神の家に登ろう。

主はその道を私たちに示してください。

私たちはその道を歩もう」と。

教えはシオンから

4 主の言葉はエルサレムから出るからだ。

4 主は国々の間を裁き

多くの民のために判決を下される。

彼らはその剣を鋤に

その槍を鎌に打ち直す。

5 国は国に向かって剣を上げず

もはや戦いを学ぶことはない。

6 ヤコブの家よ、さあ、主の光の中を歩もう。

(聖書協会共同訳)

昔 Twitter と呼ばれていた某 SNS がありました。某 SNS というのでは少し言いづらいので、仮に X と呼んでおきましょう。X のつぶやきの中をふらふらしていると、マスコミなどでもよく見かける評論家の一人がこんな呟きを呟いていました。「毎年正月が来るたびに今年は平和でありますようにと思うのだけど、この数年は大体二割り増しくらいで物騒になっていく。来年はイルカが攻めてきてもおかしくない。」(小泉悠の Twitter (現 X) のポスト二〇二三年十月七日)。このユーモアのセンスについては、一旦置いておきますが、このつぶやきがお正月に言及していたことは、奇妙な偶然でした。このつぶやきが発せられた十月七日にハマスとイスラエルの交戦が始まったわけですが、この日は、九月から始まるユダヤ教の新年の後に続く、仮庵の祭りの最終日にあたり、一年かけて読んできた聖書の読了をお祝いし、新しく最初から聖書を読み始めるという Shemini Atzeret / Simchat Torah という特別な安息日だったので。これほど皮肉で逆説的な開戦日も歴史上そうそうないのではないかと思いたいところですが、第四次中東戦争が始まった日もまた、一年の罪を懺悔するヨーム・キップールという大贖罪日であったわけですから、暗澹たる気持ちになります。

この難問に対して、専門家でもない人間が思いつきのように何事かを言うことは、事態を悪化させるばかりでしょう。しかし、専門家でない人間であっても、心に留めておきたいことがあります。この暗澹たる出来事を中心にある憎しみの途方もない重さと痛みの深さです。

このような、切実な痛みの経験を背景にもち、なすすべなく沈黙してしまう他ないような強さの憎しみは、聖書の端々に見ることができます。例えば、ヨエル書という旧約聖書にはこんな言葉があります。

⁵ あなたがたは私の銀と金を奪い／貴重な宝を自分たちの神殿に運び去った。

⁶ ユダとエルサレムの人々をギリシア人に売り渡し／故国から遠く引き離れた。

⁷ あなたがたが彼らを売り渡したその場所から／私は彼らを奮い立たせ／あなたがたの頭上に報いを返す。

⁸ 私はあなたがたの息子、娘を／ユダの人々の手に売り渡し／ユダの人々は彼らを／遠くの国民、シエバ人に売りさばく。／確かに、主が語られた。

⁹ 国々の民にこのことを告げ／戦いの備えをせよ。／勇士を奮い立たせ／戦士をことごとく集めて上らせよ。

¹⁰ 鋤を剣に、鎌を槍に打ち直し／弱い者にも、「私は勇士だ」と言わせよ。(ヨエル四：五―一〇)

ヨエル書では、神が、かつてユダとエルサレムに向けられた不正義の仕打ちに憤っています。ユダとエルサレムの人々が味わった苦痛と憎しみを神は知っておられるがゆえに、彼らの無念をあたかも神が代弁しているかのようです。この憎しみの激しさは、平和な世界で食物を生み出すための道具であったものを武器に変え、力が弱く戦闘に加われないはずの者にさえ兵士であることを強いるほどに強いのです。

このヨエル書の言葉の中で、エルサレムという町の名前はこれ以上ないほどに皮肉で逆説的な名前になってしまっています。エルサレムという町の名前は、紀元前一八世紀にはすでに確認できる古い由来を持つ名前ですが、おそらくアッカド語あるいはシュメール語であっただろうと思われるこの町の名前の意味は、「平和の町」という意味なのです。

エルサレムをめぐるっての報復の連鎖が暗示されていたかに思えるヨエル書の風景、まさに終末の光景というべきものに対して、旧約聖書では、もう一つ、言葉の上で対応しつつも、全く別の終末の光景が描き出されている箇所が二箇所ほどあります。ミカ書の四章一―三節と、イザヤ書の二章一―五節です。

イザヤにおいてもミカにおいても、エルサレムはもはや「平和の町」ではありませんでした。「どうして、忠実な町が遊女となつてしまったのか。／公正に満ち、正義がそこに宿っていたのに／今や殺人者ばかりだ」（イザヤ一・二二）とイザヤはエルサレムの墮落を嘆き、神殿を頂ぐがゆえの誤った宗教的な安心感を「それゆえ、あなたがたのゆえに／シオンは畑となつて耕され／エルサレムは瓦礫の山となり／神殿の山は木の生い茂る高台となる」（ミカ三・一二）とミカは告発しました。

そのようなエルサレムの度し難い現実を見ながらも、イザヤもミカも次のように預言します。

¹ 終わりの日に／主の家の山は、山々の頭として堅く立ち／どの峰よりも高くそびえる。／そして、もろもろの民が川の流れのように／そこに向かい

² 多くの国民が来て言う。／「さあ、主の山、ヤコブの神の家に登ろう。／主はその道を私たちに示してください。／私たちはその道を歩もう」と。／教えはシオンから／主の言葉はエルサレムから出るからだ。

³ 主は多くの民の間を裁き／遠く離れた強い国々のためにも判決を下される。／彼らはその剣を鋤に／その槍を鎌に打ち直す。／国は国に向かって剣を上げず／もはや戦いを学ぶことはない。

(ミカ四：一―三)

ヨエル書の語る暗黒の終末においては、諸民族が諸民族と交戦状態に入っていました。しかし、ミカ書とイザヤ書の語る終わりの日では、多くの民族が和解し、しかもあの不正義に満ちたエルサレムが清められ、そのエルサレムに諸民族が巡礼に向かうという平和のヴィジョンがあります。ミカ書の語る終わりの日々では、ヨエル書でいのちを奪う武器に打ち直された鋤や鎌が、再びいのちを生み出すものへと変えられていきます。

その先で、ミカ書とほぼ同じ言葉を重ねるイザヤ書にだけ、最後にこの一言が付け加えられます。

ヤコブの家よ、さあ、主の光の中を歩もう。(イザヤ二二：五)

暗闇に慣れた私たちの眼に、平和のヴィジョンへの視力を与えるのは、主の光なのです。



人生を照らす光

大学宗主任 藤野雄大

ヨハネによる福音書 八章一二節

12 イエスは再び言われた。「私は世の光である。私に従う者は闇の中を歩まず、命の光を持つ。」

(聖書協会共同訳)

宗教にとって重要な儀礼の一つが葬儀です。なぜなら、死は避けることのできないものであり、誰にでも平等に訪れるものだからです。一方で、死を恐れるというのは、生物の本能と言えるものであり、また家族や友人など親しいものとの死別は、大きな悲しみをもたらすものです。そのため、どのように死を受容するかは、人間にとって時代や文化を超えて普遍的な課題と言えます。そして、長い歴史の中で、この問題と正面から向き合ってきたのが、宗教であり、特にそれぞれの宗教の教えに基づいて執り行われる葬儀という儀式になります。これはキリスト教も例外ではありません。キリスト教も葬儀を通して、死を受容し、死の離別の悲しみを乗り越える、いわゆるグリーフケアの働きを担ってきました。

キリスト教式の葬儀の特徴は、礼拝としてささげられることにあります。教会では毎週日曜日に礼拝をささげていますが、葬儀もそれに準じた礼拝の形式で行われるということです。そのため葬儀の中でも讃美歌を歌い、お祈りし、聖書の言葉を読み、説教がなされることとなります。

ただ主日礼拝での説教と異なる点としては、葬儀の説教では、多くの場合、亡くなった方の略歴、どのような人生を歩んだのかを紹介することになります。故人が、どこで生まれ、どのように生き、そしてどのように亡くなったのか、ということです。そして、その人の人生を、神がどのように導き、特にその人が、クリスチャンであった場合には、どのように信仰を与えられたのか、といった点を話すこととなります。

なぜ、このような話をしたかという点、私はここ最近、二人の親しかった人の死を経験したからです。二人とも、長年、クリスチャンとして教会に通い続けた人でした。そのうちの一人は、私が学生時代にとってもお世話になった人で、東京に住んでおられたので、残念ながらご葬儀に出席することはできません。

した。しかし、もう一人の方については、私が、その方の葬儀の説教を担当することになりました。この方は、クリスチャンホームに生まれ幼少期から教会に通っていましたが、大学生になった頃、洗礼を受け、信仰告白をして、クリスチャンとなりました。

その後、この方は大学を卒業し、一般企業に就職し、結婚し、家庭を築かれるとともに、教会にも熱心に通い続け、信仰の生涯を全うしました。この方のご葬儀の説教の準備をするにあたって、私は、ご遺族の方から、そのご生涯の一端をうかがう機会が与えられました。その際に改めて考えさせられたのは、高校生、大学生の頃に出会ったキリスト教の教えが、この方の生涯を支え、導いてきたのだということです。長い人生の中で悩む時、病む時、悲しむ時もあったでしょうが、キリスト教への信仰が、この方を支え、困難を乗り越える力となっていたということです。

この方のご生涯にも表れているように、聖書の言葉は、私たちに、どう生きるべきか、何を頼りに生きるべきなのかを指し示すものです。与えられた聖書箇所にはこう記されています。「イエスは再び言われた。『私は世の光である。私に従う者は闇の中を歩まず、命の光を持つ』」。イエスが世の光であり、イエスに従って歩むということは、闇の中に輝く「命の光」を持つことだと、聖書は語ります。先ほど触れた方も、まさにこのようにイエスの光に導かれながら、信仰の生涯を全うしたと言えるでしょう。

現代日本社会では、世俗化が進み、無宗教の方が増えていきます。むしろ特定の宗教を信じている人の方が少数派と言えます。そのため、世間一般では、宗教は、現代社会を生きる上で、役に立たないもの、不必要なもの、あるいは、最近ではカルト問題がニュースなどを通して盛んに報道されていることもあり、何か恐ろしいものというイメージが広がっているように思えます。確かに、無数にある宗教団体の中には

不健全な行為、反社会的な行為をしているものも存在していることは否定できません。しかし、一方で忘れてはならないのは、宗教というは、本来、奇異なものではなく、人類の歴史の中で一貫して存在し、現在でも、世界的に見れば、宗教を信じている人の方が多いということです。なぜ、どうでも良いもの、必要なものが、長い歴史の荒波を乗り越えて、今日まで多くの人の支持を得ているのでしょうか。それは、先ほどの聖書箇所にも表れていたように、信仰とは、先行きの見えない不安の中で、私たちが進むべき道を照らす光となりうるものだからです。

古い諺にも「人生一寸先は闇」という言葉があります。この諺の通り、人生には何があるかわかりません。順調だと思っても、突然困難が降りかかったりします。病気や怪我をすれば、それまで当たり前だったことが、突然できなくなったりすることもあります。進学や就職などで思い通りの進路を進むことができなくて、苦悩することもあります。あるいは社会全体が、闇に閉ざされているような閉塞感を覚えることもあります。そのような中で、生きる希望を失ってしまうこともあるかもしれません。その時、わたしたちを根底から支えてくれるもの、生きる力を与え、進むべき道を示してくれるもの、それが信仰というものです。

皆さんにとっての「命の光」、人生を照らす光とはなんでしょうか。皆さんが、人生の中で困難に直面するとき、自分の力では解決しようのない深い悲しみに直面したり、暗闇に閉ざされてしまったと感じる時、皆さんの光、生きる希望を与えてくれる光とはなんでしょうか。キリスト教を建学の精神とする東北学院で学んでいる皆さんには、充実した大学生活を送り、将来につながる貴重な経験をしてほしいと願っていますが、同時に皆さんの生涯を照らし、生きる道を示す「命の光」を見つけていただきたいと思います。



一寸先は闇、しかし、その先は光

大学宗教主任 吉田 新

ペトロの手紙一 五章八―一〇節

8 身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、誰かを食い尽くそうと歩き回っています。9 信仰をしっかりと保ち、悪魔に立ち向かいなさい。あなたがたのきょうだいたちも、この世で同じ苦しみに遭っているのは、あなたがたも知っているとおりです。10 しかし、あらゆる恵みの源である神、キリストを通してあなたがたを永遠の栄光へ招いてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみの後で癒やし、強め、力づけ、揺らぐことがないようにしてください。

(聖書協会共同訳)

一寸先は闇、という言葉があります。私たちは誰しも生きていく中で、さまざまな苦しみに襲われることがあります。順風満帆と思える人生を送っていたにもかかわらず、ある日、突然、試練に見舞われることがあります。

皆さんは日本の若い人たちの死因の第一位が何かご存知でしょうか。とても悲しいことに、それは自殺です。二〇代においては、全死因の約半数が自殺です。若者の自殺は先進七か国で日本がトップと言われています。職場の悩み、恋愛などの人間関係の悩みが自殺の原因としてあげられています。近年では二五〇〇人近くの二〇代の若者が自ら命を絶ち、昨今のコロナ禍では小中高生の自殺率の増加が大きな問題となっています。ただし、自殺未遂の数は自殺の数の一〇倍と言われていますので、日本では二万人以上の二〇代の若者が自殺未遂をしたと考えられています。ある調査によれば、二〇代の若者の三三パーセントが、今まで本気で死ぬことを考えたことがあると答えています。自殺は私たちにとって本当に他人事ではありません。

自ら死を選ぶことを考えてしまう方、精神的に追いつめられてしまう方の多くは、自己肯定感が奪われていくと言われています。自己肯定感とは、心の奥底で自らの存在を承認し、長所だけでなく欠点も含めて自分には価値があると思えることです。他人に「おまえの顔など見たくない」「消えてしまえ」など、自らの存在を土台からくつがえすような罵詈雑言を浴びせられたり、嫌がらせや暴力を受けたりすると、自分の価値を認められなくなっていくと考えられています。たとえば、就職活動で何社も書類審査や面接などで落とされたことで自信を失ってしまい、一歩も家の外に出ることができなくなった学生がいました。驚くべきことに、就職活動中に本気で死にたい、消えたいと思った学生は約二割にものぼるそうです。

危機的な状況に置かれていた人にとって、大きな問題はその状況に置かれてしまっている時に、いまの自分の姿、現在の自分の状況しか見えなくなってしまうことだと思えます。視野狭窄と言うのでしょうか、これからの自分、明日、数週間後、数か月、半年後、そして、もっと先の一年後、一〇年後の自分が見えなくなってしまうです。つまり、自分の前には未来が視界から消えていってしまうのです。しかし、今は苦しいけど、必ず、未来があり、先があります。その先を見据えて、いま降り懸かる苦難に対処していく。とても大変なことですが、そのような視点がわたしたちには求められているように思えます。

さて、本日、皆さんとお読みしたペトロの手紙は、初代キリスト教徒が迫害下に置かれた時代の書簡です。「あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと歩き回っている」とあります。「敵」と訳されている部分ですが、もともとは法廷での敵対者を指す言葉です。あなたがたを貶めようと訴える者が、獅子のように食いつくすとありますが、原文では「飲み込む」です。このような恐ろしい描写のすぐ後には、「しかし」という逆説の接続詞があります。

この「しかし」はギリシア語の原語では「デ」の一音です。第一ペトロ書の送り手は、困難な現実を語ったすぐ後に、「しかし」と一語付すことにより、その先にある未来を指し示しています。ある聖書解釈者はこの「しかし」を「大いなるしかし」と呼んでいました。これは正しい理解だと私も思います。この「しかし」があるからこそ、私たちは襲いかかる試練に打ちのめされることなく前へと歩を進めることができるのです。

「信仰にしっかりと踏みとどまる」とあります。この信仰とはなんでしょうか。ある研究者はここで語られる信仰とは、人間には理解し難い苦難のなかにあっても、その苦難にも関わらず神に寄せる全幅の「信

頼」であると理解しています。ですから、「信仰にしっかりと踏みとどまりなさい」とは、神との絆をしっかり保ち続けるとも受け取れます。繰り返しますように、この手紙は極めて厳しい迫害下に置かれた人々に向けて記された手紙です。困難な状況に置かれた人々に「信頼を絆にしよう」と励ましています。神が強め、力づけ、揺らぐことがないようにしてくださいさるのです。

たとえ、大小の困難に直面したとしても、心が壊れそうになったとしても、私たちには必ず「しかし」があります。未来があることを忘れないでください。

一寸先は闇という言葉があると冒頭で述べましたが、本日の聖書箇所を読んだ私たちはこの言葉を次のように続けたいです。一寸先は闇、しかし、その先は光。



光の中を歩む

大学宗主任 渡邊 有美

ヨハネの手紙一 一章五〜一〇節

5 私たちがイエスから聞いて、あなたがたに伝える知らせとは、神は光であり、神には闇が全くないということです。6 神と交わりを持つていると言いながら、闇の中を歩むなら、私たちは偽りを述べているのであり、真理を行ってはいません。7 しかし、神が光の中におられるように、私たちが光の中を歩むなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます。8 自分に罪がないと言うなら、自らを欺いており、真理は私たちの内にありません。9 私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、あらゆる不正から清めてくださいます。10 罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とすることであり、神の言葉は私たちの内にありません。

(聖書協会共同訳)

皆さんは、SF映画で、光の中に主人公が歩んで行き、別の世界に入るのを見たことがあるでしょうか。光の中は真っ白で何も見えないように描写されることが多いようです。そしてその先には、自然豊かな世界であったり、過去の世界であったり、未来の世界、エイリアンのいる世界が存在しています。全き光の中に私は入ったことはありませんが、「神は光」であるという時に、このようなイメージを思い浮かべます。一寸の暗闇もない存在。聖なるお方。私には無縁であるように思える存在。少しの汚れも赦されないような存在……。果たして光の中を私たちはどのように歩むことができるのでしょうか。

光の中を歩めるなら歩みたいけど、どうやってか分からない、と言うのが、私たちが通常抱く感情ではないでしょうか。そんな時、やっぱり『聖書』の神様は自分には関係ない、結局、どこにも希望なんてないんだと考えてはしまわないでしょうか。情報社会に生きている私たちには、常に様々な情報が飛び交い、自分自身の考えを見失わせ、また分刻みの忙しい生活の中では、しばしば、私たちの気持ちと身体が一致しないことがあるかも知れません。気持ちが頑張っても、身体がついていけない時、またその反対もあるでしょう。身体は元気だけど気持ちがついていけない時です。どちらかに無理が来ている時、私たちは自分自身を労わり、受け入れ、褒めてあげることが必要です。ただ、自分自身を受け入れることができて、それだけでは光である神と共に歩むことはできません……。なぜなら神は聖なる神だからです。

ところで、皆さんは自分の罪について考えたことはあるでしょうか。「聖書を学ぶ」の授業や礼拝のメッセージでは、時に「罪」についてお話しすることがあります。キリスト教では、すべての人間は、人祖アダムとエヴァの罪ゆえ、「原罪」があるとされます。しかし私たちは、日々の罪についてはあまり考えないかもしれません。罪には、いわゆる「犯罪」というものではなくとも、嘘をついたり、友達のものを盗

んだり（大したものでなくても）、良心が咎めることをしたりすることが挙げられます。或いは本当はすべきことで、できるのにしないこと（人を助けるなど）も罪となり得るかも知れません。何が罪かに関しては、神のみがご存じです。ただ、犯罪としての罪ではなくとも、聖なる神の前に罪がないというならば（八節）、それは自分を欺いていることになる、『聖書』は述べています。つまりそこに、真理は存在していないことになるのです。ではどうして、罪がないというと真理は存在しないことになるのでしょうか。

「箴言」二〇章九節：「誰が言えようか「私は心を清く保ち、罪を清めた」と。」とあります。私たちが完全に清めることができるのは、神しかないことが『聖書』を読むと明らかになります。

しかし同時に、罪を告白するならばあらゆる不正から清め、罪をも赦してくださいとも記されています。もし、皆さんがこれまでに罪を犯したことがないと考えるならば、神を偽り者とすることになります。また、神との和解のために罪の生け贄となったイエス・キリスト、救い主をも必要としないことになるでしょう。救いというと、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。本当に切羽詰まった人だけが必要とするものだと考えるでしょうか。例え、救い主を必要とするほどひどい罪を犯したことがなくとも、聖なる神の目には、罪は罪となります。また、悪いことをしてはいないと考えている人も、悪い言葉を発してはいないでしょうか。「ヤコブの手紙」三章二節には、以下のようにあります。「私たちは皆、度々過ちを犯します。言葉で過ちを犯さないなら、その人は体全体を制御することのできる完全な人です」。また、「ヨハネによる福音書」八章四四節には、「あなたがたは、悪魔である父から出た者であって、その父の欲望を満たしたいと思っている。悪魔は初めから人殺しであって、真理に立ってはいない。彼の内には真理がないからだ。悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている。自分が偽り者であり、偽りの父だからで

ある」とあります。悪魔は嘘つきの王様なので、一度でも嘘をついたことをある人は、罪人ということになります。気をつけたいのは、父なる神は、責めるためにこれらのことを書いているのではなく、「愛の神」であるため、清くなる方法を教えてくださっているのです。それは、光の中、愛の中を歩む方法です。つまり九節にあるように、単に罪を告白すれば良いのです。またイエス・キリストを信じるならば、義とされるばかりか、永遠の命をも与えられると「ヨハネの手紙一」四章一六節には記されています。「私たちは、神が私たちに抱いておられる愛を知り、信じています。神は愛です。愛の内にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってください」とあるからです。自分ではできなくとも、神が私たちを清め、愛の光の中を歩ませてくださるのです。

「光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい」（「ヨハネによる福音書」一二章三六節）。



弱さの中で現れる力

大学宗主任 渡邊 蘭子

コリントの信徒への手紙二 一二章七、一〇節

7 また、あまりに多くの啓示を受けたため、それで思い上がることのないようにと、私の体に一つの棘が与えられました。それは、思い上がらないように、私を打つために、サタンから送られた使いです。

8 この使いについて、離れ去らせてくださるようには、私は三度主に願いました。9 ところが主は、「私の恵みはあなたに十分である。力は弱さの中で完全に現れるのだ」と言われました。だから、キリストの力が私に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。10 それゆえ、私は、弱さ、侮辱、困窮、迫害、行き詰まりの中にあっても、キリストのために喜んでいきます。なぜなら、私は、弱いときにこそ強いからです。

(聖書協会共同訳)

今日お読みしたのは、キリスト教最大の使徒といわれるパウロの言葉です。ここで、「力は弱さの中で完全に現れる」という言葉が出てきます。これはどういう意味なのでしょう。今日はこの言葉の意味を探りながら、私たち人間が苦しみや弱さをどのように捉えていけばいいのかについて考えたいと思います。

パウロとは、初期のキリスト教伝道者です。このパウロの伝道によって、ユダヤ民族以外の、地中海世界にいるたくさんの方々の民族にキリスト教が広まりました。パウロは、いろんな地域を旅して、福音を宣べ伝えました。しかし、パウロがさまざまな地域に赴いて伝道する際に、一つの障害となるものがありました。それは七節に書かれている、体に刺さった一つの刺、というものです。それが具体的にどのようなものなのかははっきり書かれていないためわかりません。しかし、パウロは何かしらの持病を抱えていた可能性が高いようです。その病気はパウロにとって、かなり苦しみを伴うものだったのでしょうか。八節には、パウロが神に対して、どうかこの刺を取り除いてください、と三度祈ったと書かれています。ここには三度祈ったと書かれています。これは文字通り三度祈ったというよりも、何度も何度も祈ったということの意味するようです。しかし、そのパウロの切実な祈りに対して、神は、九節にあるように「私の恵みはあなたに十分である。力は弱さの中で完全に現れるのだ」と語りました。病を取り除いてくださいと祈るパウロに対し、神は、自分の力は弱さの中で完全に現れる、と語ったのです。普通に考えれば、いろんな地域に赴いて伝道するには、病などはなく、健康な方がいいに決まっています。しかし、神はそのように考えておらず、逆に、病を持つパウロのような存在のうちにこそ、神の力が完全に現れる、と語ったのです。これはどういうことなのでしょう。

パウロ自身は七節で、この病が与えられたのは、自分が思い上がらないためだ、と説明しています。確

かにパウロは傲慢になってしまふ可能性がありました。今日お読みしたところの前の箇所には、パウロが第三の天という幻を見たことが書かれています。パウロは他にも神から多くの啓示を与えられていました。たくさんの啓示を神から与えられたら、自分は特別な存在なのだと、自分は他の人よりも優れた存在なのだと思ってしまう可能性があります。そこでパウロは、自分が傲慢にならないために、この病が与えられたのだと考えているのです。しかし、ここまでみても、なぜ病という弱さの中で神の力が完全に現れるのかについては明確になりません。

そこで、傲慢の問題性について考えてみたいと思います。なぜ傲慢になることが問題なのでしょう。病に苦しまなければならないほどに、それほどに、なぜ傲慢になることがよくないことなのでしょう。これに対してはいろいろな答えがあると思いますが、私は、傲慢になることで、他の人の痛みや苦しみに共感できなくなることが一番の問題ではないかと思えます。苦しいことや弱点は何もなければ、人は傲慢になり、他の人の苦しみや痛みにはなかなか共感できないでしょう。病という弱点があることによって、パウロは人の苦しみや痛みに関心し、寄り添えるようになったのではないのでしょうか。

私自身、生きる中で、人間関係で生じる苦しみや、性格的な弱さ、コンプレックス等、人にはなかなか言えない苦しみや弱さがあります。その中には、自分ではどうしようもできず、もどかしい思いを抱え、どうして自分がこんな目に合わないといけないのだろうと思ひ、涙することもありました。しかし、そうした苦しみを経る中で、自分と同じように苦しい思いを抱えている人の話を見聞きすると、「ああ、その気持ちわかるな」と自然と共感できるようになることがありました。おそらく、みなさんの中にもそうした経験をしたことがある人がいるのではないのでしょうか。

パウロも、病という苦しみを抱えていました。そして、その苦しみを抱えていたがゆえに、伝道に向かった先にいる人々の苦しみに寄り添い、傲慢になることなく、謙虚な気持ちで伝道ができたのではないでしょう。もしも、何の苦しみもない、何の弱点もないような人であれば、おそらく、苦しみを抱え、切ない思いで生きる多くの人々に寄り添って、伝道していくことは難しかったのではないかと思えます。そのように考えると、弱さをもっている人を通して、神は救いの働きをする、ということが言えると思えます。そして、このことがまさに、神の力が弱さの中で完全に現れる、という言葉の意味なのではないでしょうか。神は、何の弱点もない人を用いるのではなく、苦しみや痛みを抱えている人を用いて、救いのわざを行うのです。そして、そうした人こそが「地の塩、世の光」なのだと思います。みなさんの中にも、今現在、苦しい思いを抱えている方がいるかと思えます。しかし、その苦しみは無駄ではなく、他の誰かの苦しみに寄り添い、そうして神が働くことができるような道につながっているのです。

そして、そうした生き方は、誰かの救いにつながるというだけでなく、自分にとっても深い意味で幸せな生き方だと思えます。確かに、苦しいことやコンプレックス等がなければ、それはそれで幸せかもしれません。しかし、それゆえに人の苦しみに共感できず、寄り添うことができないとすれば、それはすごくさみしいことでしょう。実際、生きる中でいろんな人との出会いがあります。そしておそらく、苦しみを抱えていない人の方が少ないでしょう。自分自身が苦しみを経ることで、出会う人々の苦しみに共感し、寄り添えるという生き方は、人と本当に深い関係性を築ける、幸せな生き方だと思います。



光は暗闇の中で輝いている

二〇二三年 職員クリスマス礼拝説教

大学宗教部長・宗教センター主任 原田浩司

ヨハネによる福音書 一章一〜一四節

1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。 2 この言は、初めに神と共にあった。
3 4 万物は言によって成った。言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に成ったものは、命
であった。この命は人の光であった。 5 光は闇の中で輝いている。闇は光に勝たなかった。
6 一人の人が現れた。神から遣わされた者で、名をヨハネと言った。 7 この人は証しのために来た。光
について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じる者となるためである。 8 彼は光ではなく、
光について証しをするために来た。
9 まことの光があった。その光は世に来て、すべての人を照らすのである。 10 言は世にあった。世は言
によって成ったが、世は言を認めなかった。 11 言は自分のところへ来たが、民は言を受け入れなかった。
12 しかし、言は自分を受け入れた人、その名を信じる人々には、神の子となる権能を与えた。 13 この人々
は、血によらず、肉の欲によらず、人の欲にもよらず、神によって生まれたのである。

14言は肉にくとなつて、私わたしたちの間あいだに宿やどつた。私わたしたちはその栄光えいこうを見た。それは父ちちの独り子ひとりごとしての栄光えいこうであつて、恵めぐみと真理しんりとに満みちていた。

(聖書協会共同訳)

東北学院にとりまして、今年、大学は五橋キャンパスの開学という歴史的な転機を迎えました。記念すべき第一回の五橋クリスマスを開催し、ツリーのイルミネーションの点灯式も地域の多くの方々を迎えて開催できました。こうしてクリスマスを迎えるまで、四月の開学式からあつという間に時間が過ぎたと感じられる方、それとも四月の開学式がもう随分昔のことと感ずる方、それぞれおられるかもしれませんが、こうして無事に二〇二三年の年末を迎えられたことを、主なる神に感謝したいと思います。

そして今年、これまでコロナ禍によって各設置校においても行事などの活動が何かと大きく制限されてきましたが、感染症の危険度の分類が二類から五類に引き下げられ、制限が解除され、それぞれの設置校が活発な活動を再開しました。大学では、コロナ禍を経て四年ぶりに対面で開催した教職員修養会は、試験的な試みとして、各設置校の校長、宗教主任の先生たちにも参加していただき、東北学院中高大の卒業生で、息子も東北学院大学に通わせ、お孫さんも現在通わせているという、関東学院の学院長、松田和憲先生を講師にお迎えしました。そして、東北学院のスクールモットー「LIFE LIGHT LOVE」について、本学のこれまでの先生方が言及した言葉を集めてくださり、「LIFE LIGHT LOVE」の由来として最も可能性が高いのがヨハネによる福音書三章一六節以下であるという認識を共有すること

ができました。ヨハネによる福音書三章に「命光愛」の言葉が揃っています。そして、今日の礼拝は改めてヨハネによる福音書の第一章のクリスマスの記事から、「いのちLIFE」と「ひかりLIGHT」に着目し、キリストの降誕の恵み、今年のクリスマスの喜びを共に祝い分かち合いたいと思います。

さて、聖書が描くクリスマス由来事は、マタイ福音書に記される三人の占星術の学者たちのドラマも、ルカ福音書に記される羊飼いたちのドラマも、すっかり陽が暮れた闇の中で起きました。十二月の冬の季節は日照時間が短い、闇が長く続く季節です。旧約聖書の創世記第一章は神によるこの世界、天地創造が描かれています。神がこの世界の最初に、言葉によって創造されたのが光でした。三節から「神は言われた。「光あれ」。すると、光があった。神は光を見て良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり朝があった。第一の日である。」神は闇の中に、言葉によって、光を創造された。世界の創造と救い主イエス・キリストの誕生は、ヨハネによって一つに結び合わされ、ヨハネは福音書を「初めに言があった」と記し、この第一章を読む人は「初めに神は天地を創造した」という神の創造の御業を思い起こします。この世界が創造される前、すべては闇に覆われ、闇そのものでしたが、神はそこに光を創造されました。私たちの世界には夜があり朝が来ます。そして、この世界には明と暗、光と闇があります。それは、この外面的な世界だけでなく、外面的には見えない私達自身の内面的な心も、それは例外ではありません。人間の内面性の光と闇。各地で続く戦争、政治家たちの裏金問題、年末はこの暗いニュースが続いています。暗い闇です。しかし、神はそのような暗闇、光をもたらす。それがクリスマス由来事です。闇と光。光と闇。私たちはこのコントラストによって、私共がこうして迎えたクリスマス救いを心に留めてまいりたいと思います。

さて、ヨハネが語るLIFE LIGHTは四、五節でこう記されています。「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」このように「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった」とヨハネは記します。神の言の内に、いのちをもたらず神の力がある。キリスト教育に従事するわたしたちは改めて、言葉が人を生かしも殺しもすることを確認しなければなりません。そして言葉によって、わたしたちは園児、生徒、学生たちを生かし、照らし、育てる務めを共に担っています。東北学院は、イエス・キリストの誕生という、このクリスマスにもたらされた命と光、LIFEとLIGHTを、今改めて心に留めたいと思います。

この職員クリスマスは例年ですと二十四日の午前十一時から、明るい中で開催していますので、今日のように日が沈んだ闇の中、こうして共に集い祝うのは稀かもしれません。この暗い中で祝う職員クリスマス。今、戦後の平和レジームが崩れ、再び武力・戦力が幅を利かせる時代を迎えたかのような「一寸先は闇」という時代です。クリスマスにおける救い主の誕生は、力あるマッチョな大王としてではなく、赤ちゃんという全くの無力、泣くことしかできない、弱く無力な存在として、救い主はこの世にお生まれになりました。しかし、それが「LIFE命であり、LIGHT光でした」。そして、赤ちゃんは、圧倒的に愛おしく、愛さずにはいけない「LOVE愛」そのものでした。クリスマスにおけるイエス・キリストこそ私たちが「LIFE LIGHT LOVE」の東北学院の原点に立ち返る時であると言えます。クリスマスにまみえる、圧倒的に無力である赤ん坊が、逆説的に、私たち人間にはできない、人間の内に潜む闇としての罪を贖い、闇から解放する光として、神によってこの世界に与えられました。九節には「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである」とあります。ですから、その光はキラキラ

と輝き放つ強い光のように思われます。しかし、この光は逆説的に、この礼拝堂の正面に灯されたキャンドルの先端の炎のように、とても小さく、か弱い光として、救い主は誕生しました。強烈な光としてではなく、提灯の光のように、闇夜の道をほのかに照らし出す小さな光です。それが、救い主が小さな赤ちゃんとしてこの世に生まれたことの一つの意味と言えるでしょう。一人ひとりが歩みを進める道を照らす光として、一人ひとりと共にいてくださる「インマヌエル」の光として、イエス・キリストはお生まれになりました。イエス・キリストは闇の中で、東北学院に「命(LIFE)」を与え、闇の中で東北学院がまことに進むべき道を照らす灯の「光(LIGHT)」です。

この「光は暗闇の中で輝いている」。消えることがなく輝き続ける光として、神は私たちに光を与えて下さった、いや創造者なる神はそもそものはじめから「光あれ」とこの世界に、私たちに、光を与えて下さる。クリスマスは、この産声を上げた乳飲み子イエス・キリストを神がこの世に、わたしたちに授けてくださった光として認識し、改めて私たちが感謝して、その光の恵みに与る時です。

外的にも内的にもそこかしこに闇が潜む私たちの世界です。その世界に、イエス・キリストという光が与えられ、その光は世界の闇に飲み込まれ、消えてしまうのではなく、闇に勝利をすることを、クリスマスは私たちに伝えます。罪という暗闇に、そして死という暗闇にさえ、復活において勝利する光であることを、私たちは信じます。私たちはこの光と共に、主イエス・キリストと共に、東北学院は次の新しい年を歩み、歴史の歩みを進んでいくのです。このクリスマスの光の中で、東北学院に連なる私たちも、それぞれの人生の確かな一歩を力強く進めてまいりましょう。インマヌエル、神はあなたと共にいます。クリスマスおめでとうございます！

《祈祷》

光の主よ。このクリスマス、あなたがこの世に与えて下さった赤ん坊のイエス・キリストが喜びの光、希望の光であることを改めて心に覚えます。主なる神、どうかあなたの光によって、東北学院の進むべき道、そして私たちが進むべき道を照らして下さい。今この時も闇の力が世界を覆い、命が奪われる戦いが起きています。どうかクリスマスを祝うこの時、主の光の下で私たちが真の喜びと平和、真の希望へ導いてください。そして東北学院を常に光へと招き導いて下さい。神が共にいてくださる豊かな恵みに感謝し、救い主イエス・キリストの御名によって祈り願います。アーメン。



恐れずにキリストを迎えて

二〇二三年 東北学院大学クリスマス礼拝説教

日本基督教団鎌倉雪ノ下教会牧師 中村 慎太

マタイによる福音書 一章一八〜二五節

18 イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒に
なる前に、聖霊によって身ごもっていることが分かった。19 夫ヨセフは正しい人であったので、マリア
のことを表沙汰にするのを望まず、ひそかに離縁しようとした。20 このように考えていると、主の
天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れずマリアを妻に迎えなさい。マリアに宿った子は
聖霊の働きによるのである。21 マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分
の民を罪から救うからである。」22 このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われたこ
とが実現するためであった。

23 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

これは、「神は私たちと共におられる」という意味である。24 ヨセフは目覚めて起きると、主の天使が

命じたとおり、マリアを妻に迎えた。25 しかし、男の子が生まれるまで彼女を知ることにはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。

(聖書協会共同訳)

「なんでわたしがこんなことに」や、「どうしてこのような立場に立たされなければならないんだ」と思うことが、皆さんにもあるでしょう。

私たちは、何か大変なことが起こった時に「なんでわたしがこんな目にあうのだろうか」と思うことがあります。あるいは、自分の今いる立場をふと考えると、「なぜ自分はいまここに立たされているのだろう」と考えることもあるのです。

先ほど、マタイによる福音書に記されている、クリスマスの出来事を共に聴きました。

イエス・キリストがこの地上に来てくださった時、それは、喜ばしい時です。しかし、ヨセフという人にとっては、大きな困難の時でした。

マリアと婚約していたヨセフ、そのまま結婚まで至れば、人生で特に嬉しい時となるはずですが。しかし、それが覆される出来事が起こりました。

一緒になる前に、マリアが身ごもった、妊娠したのです。

実は、それは、婚約者マリアの死を意味するものでもありません。

婚約は結婚と同じように大切にされていたものです。その約束がありながら、妊娠した。そしてヨセフには身に覚えがない。他の男性との関係が考えられることとなります。マリアが姦淫、今でいう不倫と同

じ罪を犯したと判断もできません。聖書の旧約には、姦淫の罪を犯したら、その者は死刑にするように定められています。ヨセフはそのように、マリヤを告発するべき状況でもあったのです。

ヨセフには大きな衝撃があったはずです。婚約者としてマリヤを愛していたでしょう。そうであればなおのこと、マリヤの妊娠の事実によって、彼女に裏切られたと思ったはずです。マリヤに他の男性がいるなら、自分はマリヤとは結婚ができない、それはヨセフが姦淫をしてしまうことになる。だからと言ってマリヤを告発したら、マリヤは死刑になってしまう。

ヨセフはマリヤの死を望みませんでした。何とかしてマリヤが生きていてほしかった。だから、彼はマリヤを告発するなどはせず、ひそかに離縁しようと思ったのです。そうすれば、婚約者であるヨセフが、マリヤを妊娠させておきながら、離縁をしたとして、ヨセフが人々から悪く言われることで、何とか収まる。

ヨセフは、「どうして自分にこんなことが」と嘆きながら、そのように決心をしたと思うのです。何とか自分の知恵を働かせて、マリヤを守ろうと思ったのです。

しかし、主なる神さまは、そのヨセフに新しい道をお示しになります。主なる神さまから遣わされた天使はヨセフに告げました。「ダビデの子ヨセフ、恐れずマリヤを妻に迎えなさい。マリヤに宿った子は聖霊の働きによるのである。」

主なる神さまは、ヨセフにマリヤと、その子と共に生きる道を示してくれました。マリヤに他の男性がいるのではなく、聖霊の働きによって、その子が生まれたことを示してくれたのです。

天使はさらに告げます。「マリヤは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民

を罪から救うからである。」

皆さん、この天使の言葉の意味について、聞いたことはあるでしょうか。特にここにはイエスさまの名前の由来も含まれています。イエスさまの名前には、もとの言葉から意味を見出せるのです。イエスという名には、「主は救い」という意味があります。天使は、ヨセフに、その子が人々を救う、救い主であることを、あらかじめ指し示してくれたとも言えます。

そして、このイエスさまのことを、主なる神さまは旧約の預言者を通しても伝えていました。マタイによる福音書はそのことも指し示します。「このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われたことが実現するためであった。『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』これは、『神は私たちと共におられる』という意味である。」

この天使の告げたことは、人々に対しての救いでした。しかし、私は思うのです。まずこの時、絶望から助け出されたのは、ヨセフ自身ではなかったかと。

愛するマリアと共にいられる道が示された。もし、マリアをひそかに離縁したとしても、マリアは子どもを抱えたまま、誰にも支えられずに生きていくことしかできなかったかもしれない。それはヨセフにとっても悲劇となることだったでしょう。

しかし、主なる神さまは、ヨセフを導き、その子のために生きる役割を与えてくださった。実際、これから幼子イエスさまを襲う危険がありました。その時、ヨセフが父親として、幼子イエスさまを守ることができるようになってくださったのです。

恐れずにマリアを迎えなさい。それは、救い主であるイエスさまを迎え入れることでした。その救いの

うちに、恐れから解き放たれて、救い主が、神ご自身であるお方が共にいることを実際に知る歩みが、ヨセフに与えられたのです。

私は思います。実は聖書は、ヨセフが、イエスさまのために生きた最初の人物として記しているのではないかと。

そして、この時の幼子であるイエスさまこそ、私たちのために仕えてくださった方でした。父なる神さまの愛を私たちに伝えてくださった。「父なる神さまは、あなたたちを見捨てたりはしない。どれだけあなたたちが離れようと、あなたたちを愛し続けている」と、その愛を伝えてくださいました。その父なる神さまのところに、私たちが立ち帰ることができるよう、私たちの背いてしまった罪を背負って、十字架にお架かりになってくださるお方でした。そして、復活して、新しい命の希望を、私たちにくださったのです。

それこそが、主なる神さまの救いの出来事だったのです。その主イエスこそ、私たちと共にいてくださる神さまなのです。インマヌエルのイエスさまは、私たちと一緒にいたいと決心して、この地上にまで来てくださった。死を打ち破ってまで、私たちと共にいてくださる方なのです。

イエスさまの父となったヨセフは、そのイエスさまの十字架と復活の出来事の時には、もう地上の命を終えていたのではないかと思われれます。彼のことは、福音書の後の方では書かれていないからです。しかし、彼はイエスさまが父なる神さまの愛を伝えるために、その福音が世界に広く伝えられるために、最初の役割を担ったといえるのです。

ヨセフに起こった出来事は、後の時代に生きる私たちにも通じるものです。私たちも、神さまのために

用いられることがあります。「なぜ自分がこんなことに」とか、「なぜ自分が今ここにいるのだろう」と私たちは自分を振り返ります。この礼拝堂に集っていることも、この大学で、イエスさまのことを知らされたことも、です。

それは、世界に神さまの愛を、その愛のあらわれであるイエスさまを、伝えられるようになるためではありませんか。

世界は、愛を必要としている。求めて苦しむ人がいます。

しかし、私たちはその愛を伝える言葉を知っています。

私たちの主である神さまは、私たちを見捨てるようなお方ではない。どれほど世界が困難に満ちて、絶望に囚われそうになることがあっても、神さまはあなたを愛している。

私たちに愛を注ぎ、役割を与えてくださる主なる神さまのことを、これからもさらに知っていきましょう。そしてその主に仕えて、礼拝をささげ続けましょう。



あなたは、神から恵みをいただいた

二〇二三年 公開東北学院クリスマス礼拝説教

フェリス女学院中学校・高等学校教諭 荒木 聡

ルカによる福音書 一章二六〜三八節

26 六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。27 ダビデ家のヨセフと言う人のいいなづけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアと言った。

28 天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」29 マリアはこの言葉にひどく戸惑って、これは一体何の挨拶かと考え込んだ。30 すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。

31 あなたは身ごもって男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。32 その子は偉大な人になり、いと高き方の子と呼ばれる。神である主が、彼に父ダビデの王座をくださる。33 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」34 マリアは天使に言った。「どうして、そんなことがありえますしやうか。私は男の人を知りませんのに。」35 天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があな

たを覆う。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。

³⁶あなたの親類エリサベトも、老年ながら男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。³⁷神にできないことは何一つない。³⁸マリアは言った。「私は主の仕え女です。お言葉どおり、この身になりますように。」そこで、天使は去って行った。

(聖書協会共同訳)

主の年二〇二三年がまもなく終わろうとしております。

この二〇二三年という年はみなさんにとってどんな年であったでしょうか。

この一年、将来、歴史の教科書にのるであろうことがいくつも起こりました。

二年前にはじまったウクライナ戦争において、死傷者はロシアだけで三十一万五千人、ロシア、ウクライナを合わせると五十万人を超えられています。

また、主が人としてお生まれになったイスラエルにおいても武器を持った戦いが起こりました。既に一万八千人を超える人が命を落としたと言う報告が出ています。日本国内を見るならば、物価の高騰が進み、その一方では円安が驚く数字となっています。経済は、また、私たちの生活は豊かになってはいない。豊かになる兆しも見えないのです。また、環境、気候についても肌で感じることの出来るほどの大きな変化を感じております。そして、なによりも、今年はいわゆる「コロナ明け」と言われる年となりました。三年前に突然始まった、世界的な大感染により、この先どうなっていくのか本当に不安を感じました。

我々は得体の知れないウイルスに恐怖し、出来るだけ人との接触を避けました。教育機関も多くの教育活動を断念してきました。東北学院大学も同様でしょう。「コロナ禍」と言われた三年間、様々な教育活動をあきらめざる得なかったであろうと思います。そして、教会にとってもコロナは大きな痛手でした。教会の中には礼拝をささげることを断念してきたところもあります。神様にささげる礼拝を対面ですること、断念しオンラインでの礼拝に切り替えた教会もありました。また、これはもつと痛みを覚えることですが、聖餐を中止した教会も多くありました。讃美歌を歌うことをやめた教会、聖餐の執行をやめた教会、主の教会であつてもそこまで慎重になるくらいですから、ミッションスクールにおいてはなおさら慎重であつたと思います。しかし、このことを通して、礼拝とは何であるかということをも本当に考えさせられました。礼拝とは、私達人間がささげることのできる最も良いささげものです。神様が最も喜ばれるささげものです。

その中で、神様に賛美をささげることができないという苦しみをこの三年間、私達は乗り越えてきたのです。エジプトで奴隷となつていたイスラエルの苦しみはそういつたものであつたのだと思います。

私達の人生には時々、試練や困難が起ります。そして、人生というのは、良いことばかりが続くものではないということを私達は知っています。ですが、逆に悪いことは続くという実感があります。「よくないことは続く」とか「一難去つてまた一難」とか私達の人生にはそういった、困難や試練があり、それらを耐えて生きていく。それこそが人生であると私達は考えます。仏教の開祖であるブツダは、二五〇〇年前「人生は苦である」と言つたと言われています。人生とは思ひ通りにならないものであり、「人生は楽しいことより苦しいことのほうが多い」と悟つたと言われています。確かに、私たちのこの一年を振り

返ってみても、困難、試練、恐怖があり、これらと向き合い、耐え続けてきたではないでしょうか。そして、まさにこれこそが人生であるともいえるのです。しかし、この考え方には、大きく抜けているものがあります。それは神様です。神様抜きに、神様を無視して生きていく時、私達は一人、苦しみと向き合い、耐え忍び、乗り越えなくてはいけないとなるのです。しかし、聖書は、私達が神様抜きに、一人、そのような問題、課題に向き合うのではなく、神様と出会い、神様の恵みの中で、神様の恵みと出会って生きるものであると語ります。私達は、困難や試練、苦しみ、悲しみ、恐怖を耐え続けて生きるのではなく、恵みと出会って生きると言うのです。受験勉強のように、困難を乗り越えたなら、その報酬として、恵みが得られるわけではありません。そもそも、恵みは努力してつかみ取るものではないのです。恵みは向こうからやってきて、私達に向こうから出会ってくださるものであるのです。

では、「恵み」とは何でしょうか。先ほど、読んだ聖書には、二度「恵み」という言葉がでてきました。最初の「おめでどう、恵まれたかた」は「主があなたと共におられる」と続いて語られ、次の「恵みをいただいた」は「男の子を産むが、その子をイエスと名づけなさい」と続けて語られております。この二つの聖書箇所からわかるのは、「恵み」とは、いやなことが一つも無くなることではないということです。「恵み」とは、試練が無くなり、悩みも無くなり、困難が消えるということではありません。私達はしばしば、恵みとは今置かれている問題から解放されることだと考えます。悩み、苦しみの中にあって、祈る。そうすると、その私たちの祈りを聞いた神様が恵みとして、それらの苦しみを取り除いてくださり、悩みを解決してくださるというシステムになっていると考えるでしょう。しかし、今日の聖書からわかるのは、恵みとはそういうことではないということです。そうではなく、私達がどのような状況にいても、救い主で

あるイエス様が共にいてくださる。それが恵みだと言われているのです。マリアの人生がまさにそうでした。マリアが恵みを受けたことは、人生の試練が無くなった事ではありませんでした。そうではなく、救い主の母となるという恵みをいただいたと同時に、むしろ、想像しただけでゾツとするような試練をいただくこととなります。まだ、結婚をしていない、婚約中のマリアが幼子を身ごもったということは、大変なことでした。当時のユダヤ社会で、婚約は、ただの約束ではなく、実質、結婚と同じであったからです。婚約者ではない者と関係を持つということは、姦淫罪になりました。そして、姦淫罪を犯したものは公衆の面前で石で打ち殺されることになっておりました。死刑となるという厳しい法的措置が定められていたわけです。また、婚約中に、妊娠するということは、それが仮に婚約者の子供であっても、婚約している両者が世の中から不道徳なものとして見られることを意味しました。ですから、マタイによる福音書には、「夫ヨセフは、正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まずに、ひそかに縁を切ろうと決心した」とあるのです。婚約中の妊娠、それは、マリアにとって大きな試練であったわけです。婚約という、人生で一番、幸せと希望に満ち溢れている時に、突如として起こった試練であったのです。婚約破棄の危険、何よりも、愛する婚約者の信頼を失い、将来のすべてを失う危機がマリアを襲ったのです。しかし、その試練を通して、マリアは恵みに出会ったのです。マリアは、試練を乗り越え、救い主の母となる恵みを得ました。試練を乗り越え、ヨセフの信頼を得ることができました。それは「恵み」であったでしょう。生きていてよかったという喜びの時であったでしょう。しかし、試練を乗り越えた、その先には、また別の試練が待っていました。この数十年後、彼女は、夫に先立たれ、そして、何よりも我が子イエスが十字架にかけられるという悲惨を経験するのです。試練を乗り越えて産み、育ててきたわが子が、

十字架にかけられ、息を引き取るまで、そのすべてを見ることになったのです。夫にも先立たれ、子どもにも先立たれ、残されたマリアの辛さ、悲しみ、寂しさは言葉に表せないものであったでしょう。まさに「人生は楽しいことより苦しいことのほうが多い」そう思えるものであったかもしれません。しかし、そのマリアは人生を投げ出すのではなく、どこまでも神様の僕として立ち続けました。彼女の人生は、恵みを受けたことで、人生の試練が全くなかったということとは、ま逆のものと言えるでしょう。恵みのゆえに、試練がより多くなったといってもいいかも知れません。「苦しむこと」はもちろんそれ自体、いいものではありません。あえて、苦しみを求める必要もないと思います。しかし現実問題、誰にとっても苦しむ経験は避けがたいものです。求めなくても苦しみは湧いてでてきます。皆さんの中にも、今現在、「苦しみ」のただなかにいるという方もいらっしゃるでしょう。クリスマスどころでは無いほどの苦難、苦痛、悲しみを感じている方もいらっしゃるでしょう。健康を崩して、先の見えない将来に不安を感じている方もいらっしゃるかもしれません。「友人関係」「職場での関係」「家庭での関係」において困難の中にある方もいらっしゃるでしょう。あるいは大切な方を失ったという方もおられるかもしれません。死によって会えなくなるというのは本当につらいものです。言葉に出来ない心に大きな穴があいたような気持ちとなります。これらの「苦しみ」は、ないにこしたことはありません。しかし、それを通して恵みは来るとです。その時にも恵みは働いているのです。重要なのは、苦しみをどう避けるかではありません。また、苦しみをどうごまかすか、苦難や試練に対して目を覆うということでもありません。苦難や試練は、苦難、試練として乗り越えなければならぬものです。乗り越えるほか無いものです。重要なのは、自分の受けている苦難や試練を、客観的に見るができるかということです。離れてみるができるかというこ

とです。もっとはっきり言うならば、苦しみの視点で見るとは、恵みを送ってくださる神様の視点に立って、自分を見ることができるといことです。マリアは、この視点を持っていました。ですから、マリアは一・三八「わたしは主の仕え女です。お言葉どおり、この身になりますように」と告白しました。そして、また、これと同じ視点を、信仰をイエス様も持っていました。十字架にかかる前の夜、ゲツセマネの園でイエス様が「私の願いではなく、御心のままに行ってください（二二・四二）」と祈ったのです。婚約中、突如として、天使からのお告げを受けたマリアは、恐れ戸惑いながらも、十字架にかかる直前のイエス様と同じところに立っていたのだと思います。神様の視点に立つことができたのだと思います。そして、彼女は、「お言葉どおり、この身になりますように」と告白したのでした。それは、マリアが、この苦難の中にあっても、神様が離れることなく自分を見守っていてくださると信じていたからです。神様が、この先、必要な助け、必要な救いを完全に与えてくださることを知っていたからです。マリアは、主が必ず助けてくださることを知っていたのです。確信していたのです。マリアは、自分の身にふりかかった、苦難や危険、不安や恐れ、それらのすべてをはるかに超える恵みが与えられることを知っていたのです。何より、「神がどんな時も、決して離れることなく、共にいて下さる」事を知っていたのです。「恵み」とは、試練や、悩み、苦しみがすべてなくなることは違うのだということをお話ししました。では「恵み」とは、なんでしょう。恵みとは、「主があなたと共にいてくださる」ということです。私は決して孤独で一人ではないということ。一人ではないばかりか、主と共にいてくださるということ。主が、どんな時も、決して私たちを見捨てることなく共にいてくださるということです。私達の悲しみを、苦しみを、同じ痛み、それ以上の痛みを受けてくださる、受難の主イエスがいてくださるという

ことです。私達の喜びを、幸せを、同じように喜んでくださる主がいてくださるということです。アドヴェントを伝えるこの聖書のメッセージは「人間にとつて何が重要か」「人間とはいったい何か」について語っているように思います。人間とは何でしょうか？ 私たちはいったいなんなのでしょうか？ 人間とは「恵み」と出会う存在であります。神様の恵みと出会うべき存在であり、神様から愛され、神様が共に歩んでくださる存在が私達なのです。イエス・キリストとの出会いは、この神様の愛と出会いなのです。これから先にも、私達は、様々な困難、試練があるでしょう。一つの困難を乗り越えてもまた、新しい困難がやってきます。しかし、私達は一人ではありません。それらの問題を全て支配できる方が共にいてくださるのです。私たちはこの、神様から愛され、恵みを受けるべきものであるのです。神様の恵みと出会うために、この地上に命が与えられ、今、生かされているのです。私たち一人一人、誰一人として欠けてはならない神様から愛される存在であるのです。どんなことがあっても、たとえ、私たちが離れることがあろうとも決して見捨てず、私たちと共に歩んでくださる、主が私たちには、いてくださるのです。そうであるならば、私達もマリアと共に告白できるはずですよ。「私は主の仕え女です。お言葉通り、この身になりますように。」

あとがき

この二〇二三年度は、東北学院大学の一三七年の歴史の中でも大きな転機となる一年でした。特に大学礼拝の実施形態について言及すれば、泉と多賀城の二つのキャンパスが閉鎖され、土樋と五橋の二つに統合されたことで、去年まで講義実施日は毎日、土樋を含めた各三キャンパスで大学礼拝を行ってきましたが、この四月から統合された二キャンパスでの実施となり、大学礼拝の延べ回数が減少しました。また週に一度、泉と多賀城の寄宿舎で夜に行われていた礼拝も、寄宿舎の閉鎖と共になくなり、大学全体としての礼拝の回数が減少し、宗教部の先生方の負担は軽減されたと言えます。

さて、白を基調とした五橋キャンパスの「押川記念ホール」が新たな大学礼拝の会場となり、泉キャンパスから移設されたオルガンが、ステージの中央の上段に鎮座しています。本年度のクリスマスマスに作成され関係者諸氏に配布された本学院のクリスマスカードにはその光景が映し出されています。音響効果も素晴らしく、大学礼拝をとおして毎日オルガンの生演奏が聞けることは、学生にとってどれほど贅沢な経験でしょうか。そして、オルガンの演奏だけでなく、東北学院の礼拝では、寄稿いただいた各設置校の先生方をはじめ、また近隣の教会の牧師方やクリスマスマス礼拝の外部講師の方が、礼拝参加者に聖書の教えを伝えようと、日々取り組んでいます。今年度も寄稿いただいた先生方に感謝いたします。どうか、この世界に主の御心に適う「シャローム（平和）」が来ますように。



命の泉はあなたにあり、
あなたの光に、わたしたちは光を見る。

(詩編36篇10節 新共同訳聖書)

執筆者一覽

幼稚園園長

中学校・高等学校 宗教主任

榴ヶ岡高等学校 宗教主任

院長・学長・宗教センター所長

宗教センターチャプレン

宗教センター主事（仙台南伝道所 牧師）

大学宗教主任

大学宗教主任

大学総合人文学科長

大学宗教主任

大学宗教主任

大学宗教主任

大学宗教主任

大学宗教主任

大学宗教主任

大学宗教部長・宗教センター主任

島内久美子

松井浩樹

西間木順

大西晴樹

野村信

佐藤由子

大門耕平

川島堅二

木村純二

椎名雄一郎

田島卓

藤野雄大

吉田新

渡邊有美

渡邊蘭子

原田浩司

日本基督教団鎌倉雪ノ下教会牧師
フェリス女学院中学校・高等学校教諭

中村 慎太
荒木 聡

光から、あらゆる善意と正義と真実とが生じるのです。

(エフェソの信徒への手紙第5章9節 新共同訳聖書)



東北学院礼拝説教集

第四号

二〇二四年三月三十一日発行

発行責任者

院長・学長・宗教センター所長

大西 晴樹

編集責任者

大学宗教部長・宗教センター主任

原田 浩司

印刷・製本

株式会社 阿部紙工

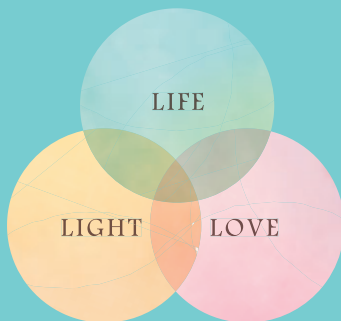
問い合わせ先

東北学院宗教センター

〒984-8588

宮城県仙台市若林区清水小路三一―一

☎〇二二・三五四・八三一〇



2024年3月31日
東北学院宗教センター発行